

麻生路郎選集

私
達

川柳雜誌社版

序

いのちある句を創れ——これは私が大正十三年に、川柳の社会化と初心者の指導と川柳研究を目標に「川柳雑誌」を刊行して以来、今日まで叫び続けて来た言葉であった。そして「川柳雑誌」によって育ぐくまれて来た多くの作家はこの言葉を金科玉条としてひたむきに作句し続けて来た。従って多くの名作家が輩出したことは云うまでもない。

昭和十一年七月、私の主宰する川柳雑誌社にとって運営上の一大転換期が来た。それは従来の同人制度を脱皮し、社は

私の個人経営となり、私自身は職業川柳人を宣言し名実共に社会的柳誌としてデビューすることとなった。これに呼応して、故西田艸樂氏（故西田当百氏の嗣子）等の提唱で、路郎門の人達のみによる川柳不朽洞会を結成、（会名は私の堂号不朽洞に因む）私の指導の下に、多事多難な戦禍にもめげず、川柳を唯一の心の糧として精進、会員は日に月に激増し、全国及び海外に於て二百数十名を数えるに至り、会員の多くは又百数十名乃至数十名の会員を擁する所謂「川雑」系と称する多数の句会を持ち、現柳壇に重きをなしている。斯うした歴史的存在を誇る川柳不朽洞会から今回会員諸氏の名吟佳什を蒐め、その真価を弘く世に問うことは寔に意義深いものと信ずる。

本句集に参加された作家の所在地は全国は勿論遠く海外に

まで及んでいる。その句歴に至っては数十年の永きにわた
り、既に一家をなしている作家も尠くないので、作家それく
の個性が遺憾なく發揮されて居り、その点柳界稀に見る絢
爛多彩な句集として大いに自負し得るところのものである。

各作家は本句集の刊行を契機として一步前進がのぞまし
く、後進はこれ等の句を範として切磋琢磨の具とされたなら
ば柳道の發展も期して俟つことが出来よう。いささか燕言を
弄して序とする。

一九五七年の新春

川柳雜誌社編集局にて

麻生路郎識

作家別索引

——五十音順——

- | | |
|----------------|----------------|
| 足立春雄……………(二) | 大阪形水……………(吳) |
| 吾郷玲人……………(四) | 大西八歩……………(六) |
| 井上湧三……………(七) | 大西迷窓……………(四〇) |
| 市場没食子……………(二〇) | 大鶴喜由……………(四三) |
| 伊藤茶仏……………(一四) | 大森娛句楽……………(四三) |
| 岩崎一伸……………(一七) | 岡村牛耕……………(四七) |
| 石川侃流洞……………(一九) | 岡田夜潮……………(五〇) |
| 石居高志……………(三) | 川村好郎……………(五三) |
| 有働芳仙……………(四) | 河村瑞川……………(五七) |
| 榎南夏六……………(六) | 河村日滿……………(五九) |
| 奥村丹路……………(元) | 龜山晴峯……………(六三) |
| 尾崎方正……………(三) | 金井文秋……………(六五) |
| 太田良子……………(五) | 神谷凡九郎……………(六七) |

北川春巢……………(六)	小池しげお……………(一〇一)
木村孤浪……………(七)	後藤梅志……………(一〇六)
木村十悟……………(七)	佐野卜占……………(一〇九)
木村水堂……………(七)	佐野白水……………(一一〇)
木村千容……………(八)	桜川不水……………(一一三)
木下幽王……………(八)	酒田清子……………(一一五)
菊沢小松園……………(八)	阪田良坊……………(一二六)
菊田いさむ……………(八)	清水白柳子……………(一二八)
岸南柳……………(九)	清水望峰……………(一三三)
黄瀬美秋……………(九)	新川博也……………(一三三)
黒川紫香……………(九)	下山清潮……………(一三六)
国弘半休……………(九)	直原七面山……………(一三八)
小西無鬼……………(九)	杉谷湖山……………(一三一)
小林文月……………(一〇一)	梶原一善……………(一三四)
小西雄々……………(一〇三)	須崎豆秋……………(一三八)

竹内圭三……………(二四二)	戸倉普天……………(二七三)
田中烏耕……………(二四三)	友淵貴山……………(二七五)
田垣方大……………(二四四)	富岡淡舟……………(二七八)
高沢一浪……………(二四八)	土井文蝶……………(二八三)
高崎雄声……………(二五二)	内藤草一郎……………(二八四)
多胡春洋……………(二五三)	中島生々庵……………(二八六)
武部香林……………(二五四)	長野井蛙……………(二八九)
武部若菜……………(二五七)	那谷光郎……………(二九三)
伊達堰子……………(二五九)	永藤彌平……………(二九四)
田代尋四……………(二六一)	永松東岸子……………(二九五)
築山快夢起……………(二六三)	永田六竜子……………(二九六)
辻圭水……………(二六三)	中松恒雄……………(二〇〇)
津田麦太楼……………(二六五)	西尾葉……………(二〇三)
寺井鋭々……………(二六八)	西いわを……………(二〇六)
戸田古方……………(二六九)	西村梨里……………(二〇八)

西出一榮……………	(三三)	福田妄夢……………	(三四七)
西辻竹青……………	(二三)	深見雅堂……………	(二五〇)
西森花村……………	(三五)	藤本滿年……………	(二五三)
新岡回天子……………	(三〇)	福島鉄児……………	(二五四)
野村味平……………	(二三)	福田丁路……………	(三五)
野村初甫……………	(三四)	不二田一三夫……………	(二五九)
野本吞水……………	(三七)	藤井春日……………	(二六三)
浜田久米雄……………	(三九)	古川魔花麗……………	(二六五)
早川清生……………	(三三)	逸見灯竿……………	(二六六)
橋本緑雨……………	(三六)	本田惠二朗……………	(二六九)
服部十九平……………	(三八)	正本水客……………	(二七一)
長谷川三司……………	(四〇)	松川杜的……………	(二七五)
長谷川迷路……………	(四三)	丸尾潮花……………	(二七七)
姫田夕鐘……………	(四三)	益永貞女……………	(二八一)
弘津柳慶……………	(四四)	真鍋一瓢……………	(二八三)

松江梅里……………	(二八六)	山口秋花……………	(三八)
前山北海……………	(二九〇)	山川阿茶……………	(三九)
松下京一樓……………	(二九二)	山本葉光……………	(三一)
松村万古……………	(二九三)	八木摩天郎……………	(三三)
三鴨美笑……………	(二九七)	若本多久志……………	(三六)
水谷竹莊……………	(三〇〇)	物故した路郎門の作家	
水谷谷水……………	(三〇四)	岩崎柳路……………	(三四一)
宮田不二……………	(三〇八)	笠原路生……………	(三四三)
村上ゆづる……………	(三一)	関本雅幽……………	(三四五)
牟田一哲……………	(三三)	高橋かほる……………	(三四七)
森本法泉水……………	(三五)	長崎柳秀……………	(三四九)
森文夫……………	(三八)	西田艸楽……………	(三五)
森下愛論……………	(三〇)	福田山雨樓……………	(三五三)
安岡珊瑚枝郎……………	(三三)	村松夢裡……………	(三五五)
山田季賛……………	(三六)	米本貴志……………	(三五七)

私
達

足立春雄

売ると言う家に油絵裸婦の像

居眠りも叱り度くない春の午后

芝居気のない代議士の淋しそう

かき氷我が日本の味を持ち

入道雲ボート一つが沖にあり

会費には入れて無かった妓くる

又水かと思う所に人の棲み

街娼が俺を社長と呼んでくれ

教授の恋だったばかりに騒れる

自画自賛ボスの演説終ったり

右顧左ベン俺は一体何処に居る

身の上を話す老妓の瘦せた膝

台風に人のふところまで案じ

女湯へヅカくくくとへッブバーン

わびしさはビールに濡れた花名刺

子にあたる他に策なき妻いとし

嫁ったのは朝からピアノが弾けるから

産み落すと言った感じで産んで去に

心臓が持たなかったでけりをつけ

終電の女視線を痛がらす

棺桶に入った様な仕舞風呂

剃刀の刃まで取り替え旅に出し

魔法瓶下げて棧敷の共白髪

あの人が株の話をする時勢

晩酌でもう父ちゃんは寝てはりま

吾 郷 玲 人

もう死んでほしい人とは淋しいネ
歌舞伎から寄り添うて出る老夫婦

服装があり代表に選ばれる

税務署と聞いて蠅取紙を踏み
子を追うてシユミーズだつたのを慌て

女子寮の廊下に二本ビール瓶

楽譜未だ読めぬ頃から鐘三つ

銀行へネッカチーフで来る女

制服の写真を見せぬバスガール

窓みんな開けて男の匂い消す

御苦労と云うてやりたい靴を脱ぎ

靴下を舞妓が脱がせたまで覚え

ノック聞き社長は伏せる「ホトトギス」

御指名の女給は世帯を持ちました

ビルの裏四五日前の雨を溜め

時間表乱して御召列車着き

保守党のピラちぎられるガード下

儲けさす話都会の午前二時

冗談を笑わぬ人が怖くなり

小鳥部へ一番先に春がくる

めし屋の子客と並んで朝を喰べ

金利から解いて聞かせて叩き売

又選挙かいなと老眼鏡をとり

釜めしを妻まゝごとのように喰べ

二次会と云えば急用出来る人

先妻の子に学問が出来すぎる

先生と呼ばれし人の市場籠

大阪は怖いよ有料トイレット

東京へ恋を語った三通話

夏草が四五日前の路を閉じ

ペン持てば男に還える章太郎

我が街の昼を知らない労働者

花嫁の眼に伊勢海老のグロテスク

酒の度が過ぎると秀才惜しまれる

雪国の娘の好きな旅役者

サーカスの小屋へ時雨が一しきり

まだ下ると客は振り向かず

ドクターが借りて帰った斗病記

乳呑児を母に託してイヤリング

井 上 湧 三

松の内甘える人もいてうれし

撫肩は淋し解けてく氷に似

温泉の効能笑い／＼聞き

診察場風景

そうと聞き田舎に行こうかとたすね

一寸ない病氣と聞かせ庸医なり

警察病院風景

官服を脱げば瘦せおり患者なり

三人の母でピンクのワンピース

乳母車押して夫人は絵にされる

振り戻す話の窓へ雨がふる

墨痕淋漓三人もいて読めませぬ

一寝入りして見る月は馬鹿に冴え

はばかりぬ姿水着の寝そべって

更年期修理の時が来ましたよ

襟足の黒子に痴人夢多く

茨竹桃爛れた恋の色で咲き

一碧の空病床に伸び上り

気の毒にギブスベットの詩人です

青函連絡船にて

愛情をかきたつように本土の灯

湯煙りに裸像百態みな動き

アイヌ部落（白老）を訪ねて

人慣れたアイヌの世辞をあわれめり

上高地にて

吹くな風今宵しすかにすゝきの穂

大宰府にて

おみくじを結ぶにうれし梅があり

福岡にて

ザビエルの鐘に旅心がふつとんで

大阪の電話片手に酌がれてい

春愁はピアノの線の切れた宵

人間ドック合間くゝに妓が訪ね

武原息女をたゝえて

君舞うて日本のよさがよみがえり

車 中

かまへんのどすかと横へ坐りに来

そうおすえ聞き惚れるまゝ京に着き

市場 没食子

夏期講座みな居眠りに来てるよう

金利追うとこまで彼も成上り

銀婚の今なお妻の手内職

タダ酒の上にタクシーで送られる

お年齢としだと言われむかつとして帰り

妻も子も酒量のふえたのを案じ

本棚へ衣食削ったのを竝べ

前と後に世辞を聞きつゝ靴すべり

もう医者も義理で診に来るだけのこと

松の内こゝにも寂し鯨幕

べた惚れの癖にお金は出し渋り

碧い瞳の子でも孫なり負うて来る
妻に客あり末の子と風呂へゆく
子から手が離れたとこへ二号の子
大阪弁の気がさす席へ招ぜられ

末っ子入学

あまえたの脊にもいよ／＼ランドセル
扇風機の代りを妻がまだつとめ
マスターがうるさしこの店縁がなし
滞納の家だに空巢殺生な
主任とはかくも休まぬものかいな
子が泣いて居るのに妻のスローモー
仏壇があいてる今日は誰の日か
バケツを下げて馬糞を拾う父を見る
若いと云う外に取柄のない二号

子供売る記事寒々と妻と読む

転任す

長ひとりだけの廻転椅子の部屋
恩給で食えずにたこ焼はじめたり
酔さます薬も晦日購って置き
呑めと言えば呑むと長男もう十九
社長以下未だに昼はうどんなり
子供等はナイフホークで喰べたがり
三度目は禿げた旦那でまだつゞき
役得の酒もビールもほろ苦し
早いものだすまた来た赤い羽根の候
妻と子の寝息にいでや割込まん
アッパツパ恋の勝利者とは見えす
エロ話知らぬ顔して後家は縫い

若い母アセモだらけの子と涼み
酒気帯びていたばかりに不利となり
飲まされて味方を売って帰って来
見どころがあり我儘を許しとき
内職の方は女房の名儀にし
威厳とやらに關する如く笑はない
売上げを子がチョロマカス歳になり
本家の軒でいっそ首でも吊つたるか
人絹のような男が跳梁し
伏線の言葉が憎いなさぬ仲
盗癖のあるとは見えぬ好い縹緞
ポトランプ組に連るうちのぼん
蒸溜水のような女に媚びられる
万障繰り合せてロハの席に行く

伊藤茶仏

貴方まで味方ですかと妻むくれ

折詰をひろげ盛儀を妻に言う

早いものですよ子供に養われ

コトリともせぬ母がいて有難し

母さんと来てデパートは食べるだけ

好きな人かいと母親気を使い

子沢山面白い程世話がやけ

まだ眠くないや折詰待っている

子をあやす顔に女は生まれつき

給料で食うた覚えのない社長

上役の近所に住んで使われる

迷信にたよる気持が解りかけ

艶っぽい唄を手帖の端に書き

いま駅であわした針がもう止まり

お嬢ちゃんを写す光栄にも浴し

あの頃は袴を着けて呑み歩き

運転手こゝはどこやと酔いがさめ

宅からの電話ウンウンウンできり

カストリの店を覗いて旅馴れる

折詰をちんばになつた箸で食ひ

流れ星旅にしあれば詩人めき

スリのヘマ私服の婦警とは知らず

また寄附を取る折詰に座らされ

芋づるを食つた昔をもう忘れ

笑うさえひもじき顔の靴磨き

膝のちり叩いて座る手内職

用便に行くにも女工走るくせ

ブラカード下手糞な字が練り歩き

招待の今日はサンづけして呼ばれ

蚊帳越しに女は物が言い易く

警官も今日は臍まで出して呑み

酒の寄附芸者の寄附も出る騒ぎ

喧嘩していても赤ちゃん生むつもり

花嫁の着付は男を寄せつけず

明眸の夫人に順を割り込まれ

イヤリング七面鳥に似て歩き

煙草吸う彼女を心よしとせず

裏街へ越して妾の多いこと

大安の日の魚屋は値切らせず

岩 崎 一 伸

口ひげをつけた息子をまだあんじ
税務署でひげも盛んにおじぎをし
坂町の月はネオンの上で満ち
内気者後姿に声をかけ
この年になっても恪気止められず
腕の良き早や新築をしやはった
良妻になれず女優の芸に生き
未練ではないがとその後の様子きゝ
共学になつて息子も針を持ち
不満をば猫に当って一人寝る
俗曲のたらい廻しにちとあわて

こいさんも早や還曆に近くなり

総選挙もつと肩書ないかしら

植木鉢置いて打水させて見る

居候当家の女中苦手なり

トルコ風呂もう行ったよと早いこと

奇偶だと何はともあれ酒になり

石川侃流洞

うれしい日父は明治の唄を出し
雨が降ろうと失業保険の支払日
虫のつく程の娘もあつてよし
都とはいゝなバツタが金になり
男ほど稼いで女嫁き後れ
売り物である間の女弱いもの
靴持った方を娼婦しょうなはつけねらい
目も鼻もとゝのいすぎて邪けんなり
女教師の恋は不倫なものに見え
九官鳥自分の声がほしくなり
聊はどれもはげてる一等車

パチンコへおんぶした子が泣きはじめ

悪友を自認し合つて縄のれん

オキヤンな子楽しい旅にしてくれる

俺の影ゴウく、慥いて列車過ぎ

腕白でよろしくそ云わぬ子に育て

招待席蚤が居つたとは言えず

一匏あてたいような脚が行く

伏字があるのは時代後れの本でした

ポンポン船へ赤い鏡台持つて住み

一代で仕上げ遠慮のない罍

メガホンへ少ししつこいなと思ひ

安静へ看護婦さんはきれい過ぎ

急流をさえぎる岩のたのもしく

石居高志

年なんていゝぢやないのとつねられる

涙ぐらい出せよと女に言うてみる

ほっとけぬ程に女に飲まれたり

行く末まであてにはせぬが落籍される

バカネーで女の抗議けりとなり

奥様のあるなしやたら聞きたがり

強引が総てをまかす気にもさせ

幽霊の様に衰へ女病み

流しには余りに惜しい三味をひき

女給まで泣かせる程の腕になり

童貞だなんて可笑しくってとひやかされ

純情が芸者の嘘をまだ信じ

幸福の限界などとぬかしたり

出張先遊廓だけは見て帰り

押しで行けと言つてた奴が失恋し

羨し恋が女の全てとは

雨の街舞妓に道をよけてやり

手切金値切る役目を言いつかり

自惚れて居たら他人に嫁に行き

慷慨のはては飲屋に夜を明かし

間借する身は犬のごと猫のごと

子が出来てみっともないと手を組まず

土曜日の午後も陳情あきらめず

葬式の仕事は男だけでやり

停年の眼に子供等が猶小さく

秋晴に俣を駆って避病院
堂々と欠勤出来る診断書
税務署が来ると紙に書いてみせ

転 勤

来てみれば別に変わらぬ西東
三役が休んでる間に認められ
受話器を押えて留守だと言いましょか
大衆の支持失うてスト終り
残業のソバを社長も来てすゝり
盃を受けるにせわし老教授
締切日迫り作家のひげが伸び
木枯に吹かれて風呂に走る影
只数行の葉書に父の愛を読む
京の雨明治の音を聞く心地

有働芳仙

パンパンの寝相鋭い陽がのぞき
パフ叩く間に嘘を考える

盆踊りパレーの癖がちよいと出る

失職の脊広へバツヂつけたまゝ

接吻を奪われそうな霧流れ

楽屋裏叱られている汗もあり

折詰のあぶないものは母が食べ

一本のルージュ魔女にし天使にし

碧い瞳に触れず産婆のうまい世辞

貧乏な事は知らない乳を吸い

郷愁しきり頬杖で支えきり

死出の旅やさしいママと子は思い

雷鳴の切れ間時計の音が生き

邪魔にされ大事にされて八十九

もう二度と恋はすまいと云わなんだ

先生に息子を頼む爛に起ち

榎 南 夏 六

空車馬も帰宅の顔をする

盃が斜になって惚けてる

オッチニオッチニと家鴨よく歩き

妻君がしっかりしていて馘になり

淋しいものにすゝきの真盛り

理想などおまへんせつせとオムツ乾し

独り者敷っ放しの匂いで寝

入学式とても廊下が長く見え

旅心地手拭下げてどてら着て

秀才として学び先生として終り

御苦労さん御苦労さんと使われて

遊んでるようにワテ恋をしてまんね

認識をさすべく突如子は泣きぬ

頓堀へ来てみてホタルは驚いた

嫌ぢゃありませんかよそゆきの声出して

覚悟した顔が出て来る社長室

計算をしいくアベックさびしけれ

階段を社長一杯に下りて来る

うっかり物言えば女強かりき

女事務いつから役得おぼえしや

大世帯父さん案外呑気なり

妻の死へバラ飽くまでも白かりき

叱られているのにうるさい扇風機

女黙笑して自由に惚れさせる

甲斐性もないのに愛人できかゝり

よく歩いたものだ足跡も残さずに
働くのが趣味の社長へ追いつけず
動かないようでもどぶは動いてる
何云うても反対されて淋しけれ
人間が嫌だとはおちぶれてからのこと
二階から冬を見ているふところ手
ベンちゃらの代りにお辞儀ばかりする
青春をブレーキかけたまま過し
残り少き命と知って老妻つまを愛す
大雪だけを云い人が去に人が来る

奥村丹路

雛の家作るにたのしい小半日

敗れたり英語はすでに忘れ果て

ともだちの現れては消ゆ雲のごと

怒りとはさびしきものをもつものよ

冬の風景を我れより先にゆく男

裾ひいて立てば芸者の壮麗な

春なれば春の姿の令夫人

お嬢さんあなた自身が神秘です

サラリーの日割勘定などすまじ

かなしみ多く夫人は歌をよみならい

挨拶のうるさき人が向うから

同じ嘘なら絢爛たる嘘をつけ
存在を無視して上座へ通る足

薄情な男いよく運に乗り

物干へ出て女中さん空を見た

妾の子また美しい生れつき

死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな

風よ吹けく風の中なるひとりぼち

ひしと抱き寄せるもの子の他になし

私は商人ますく酌ぎましよう

けだものの争うごとき恋やせん

花嫁は昔ながらに手をひかれ

いつ果つるともなく朝の靴をはき

一生をかけた会社の椅子にあり

のど自慢そんな世界もあるのなり

そもくの嘘の初めのゴム乳豆

近況にかえて

あわや庭へおちんとして子は笑い
美しきに如かず子の鼻つまんどき
愛人はうれし去りゆく影ながら
恋ならなくに赤い財布が目に残り
ほろ酔いのおまえは赤き菩薩さま
格に入り格を出でたる好々爺
表情を殺してYES・SIRと云う
いさかいの少くなりし兄いもと

尾崎方正

賃上げへ騒ぐ若さのほしい今

ブドウから梨から秋がしのび寄る

疲れたる午后はパイプもやに臭さし

パーマ乱れて不動さんの火の如し

薬瓶ごちゃ／＼並べ蒼う居る

次で降りますのやと軽く断られ

窓ぎはの女の腕は蛸に似て

四十処女きたならし／＼

持ち株の相場も知らず貯めている

プラトニック相手あっさり結婚し

一号もないのに二号すゝめられ

無理すなと云われた方が生き残り

袖口を気にせぬ方が美人なり

たま／＼行けば銀行三時まで

喋り散らして診断聴かず去に

生活に疲れ妻君猿に似る

座敷の碁のびたうどんへ振向かず

タバコ一本女の電話まだ続き

糸切れた凧のようなり家出の娘

ひと柱五万円也また涙

世に疎く月給袋のまゝ渡し

観劇ヘニキビ一つで取り消す娘

悪い道に何の苦業ぞハイヒール

流行つ妓かづらを取ればアブレにて

枯すゝき風に詩情をそゝるなり

腕時計戴くように視る薄暮

酔はなくちゃならぬ日もある幹部とか

あだ花が散ったと思え世継なし

政見を聴いて一票引込める

悠々と流れる水の恐しさ

こんな奴が軍にいたのか敗ける筈

平均寿命が延びた云うて呑んでいる

貯めて見ればまた言う事の変る君

登りつめた椅子雑用が待っている

数の子で一杯出しておっ払う

一里半たっふり歩く初詣

代筆の字をほめられて困る彼

太田良子

電話口呑んでいるとも云えぬなり
拗ねてみて脈のあるのを確かめる
奥様のへそくりをとて株屋が来
おむつ下げて別府航路の人となり
へそくりを持って心斎橋に出た
誕生日お鯛の代りという魚
老眼をかけてまだ読む積りなり
五分間だけ待ってゝとお化粧し
貧乏はいと云うと云うけれど
美しく見せる仕ぐさを娘は覚え
すねて見たけどほったらかしにされ

大坂形水

修身を抜け出た婿だ親が惚れ

良い息子さんの月給聞かされる

日曜日犬と並んだ日向ぼこ

車窓暖かチルチルミチル顔並べ

膝の子へよその母ちゃんつりこまれ

初節句本尊さんは昼寝中

その眼差し男の嘘を探りをる

自宅でも診ますどてらのまゝ診ます

ランドセル菜の花路を駈けて来る

車窓暖かこゝは明石のお舟がたんと

歯が生えた熱で良かった医者入門

パヂャマ着た妹蛸のように寝る
躰の異状聞かされる蚊帳の中
大阪のパン売切れた水見舞
水害の馱から今日も応召兵

病院にて

傷兵の妻が汗ぼの子を脊負い
下駄半ズボン夏凌ぎよい銃後ぶり
子の病氣信心のない所為にされ

大西八歩

直江津にて

降り立てば良寛さまの国の風
佐渡おけさ風に流れて来そうなり

石山寺

鐘つけば音は月までとゞきそう
火吹竹何も忘れた顔で吹き
叱る丈叱って主人風呂へ行き

祖母の死

散ってから梢の高さ見直され
元祖元祖本家本家土産物
両膝をそろえて秋の風にふれ

打水は後追いかけるように打ち

絶景の道は大きく曲るなり

アダダダアババ小児科ひまが要り

先頭はもう鐘鳴らす不動坂

スピードが好きなら早く死ねばよし

萩市にて

萩松江人も雀もふところ手

山越えて足も流れも軽くなり

父の眼にまだまだ苦労足らぬなり

鳥取砂丘

はるかなる砂丘は独り歩くべし

長女の就職を祝して

辛捧をする気の机花を活け

大西迷窓

社説面説明すれば寄り添うて
狭くとも生き抜く二人窓を拭き
土曜日は妻とテニスをする生活し
冗談に寄つても処女は身構える
手洗へ一人で立てる程に癒え
美くしい女夜汽車が好きらしい
金が無いので売店でしゃべるだけ
偽りの微笑を洩らす程に老い
短気とは別に心の温たかさ
楽しさはパパと呼ばれる日の近く
僕の代になつて借家に母住ませ

女房の希望の鶏をやつと飼い
パチンコへ行かないでネと送られる
百日も経たぬに歩んよをさせたがり
他人事なのに涙ぐむ母であり
青い眼の児も夕焼を唄つて
離婚して花の師匠で起つ気なり
へそくつてくれたで買えた乳母車
どんな用事か美人峠を越えて行き
酔えばすぐ政治く〜と言うお人
三度目のそれ見なさいへ折れておき
二人目の子が出来値切ること覚え
初孫のミルクの匂ひまで愛し
窓際のいちじく今日も一つ減り
飯台の上から坊やを手渡され

大 鶴 喜 由

その見幕に詫びられもせず

また大きな事ばかり云うてと女房

古巣とはなつかしきもの肌が脱げ

子は階下に頼みそそくさ夜の花

子のカメラ俺と女房を引っつかせ

恐ろしさ拾うて喫う気俺に見る

野暮な恋イエスカノーか聞きたがり

服務規律守り通して無能なり

日本地図胡瓜の如く横たわり

めったに／＼女女をほめず

引かれて行く女將ふて／＼しく笑い

いささかは法に触れたるチツキの荷

札束へウンとは云わぬ頼もしさ

歯ブラシが一巡りする豆の花

金あれば故郷は左程遠からず

南無阿彌陀仏となえつゝ不行跡

鬪争に勝った途端に社がつぶれ

皮肉やゝ過ぎて出世の邪魔になり

こっぼりの雪を払えば緋がこぼれ

餅がとろけますと亭主ひっぺがれ

パトロンがあるように思う金使い

京の宿金さえあればいきな雨

犬も老うれば吠えるのが邪魔くさし

人対人何のコミなどあろうぞえ

サンシーも買えず留次郎留三郎

娘の氣長者もひるむ望みもち

産ませ老けさせばばがくと

そばに誰かいるなり電話標準語

妻の氣の立つ日の子供あわれなり

おい燕が来たよ上衣脱いだるか

思い切つて言えば添えたに暮らせたに

春来てもまた春来ても未亡人

国の母くればうどんでいいと云う

見ていれば大方水の水薬

魚屋は蠅置いて行き拾うて行き

立候補あの演説は俺が書き

徹夜の子覗けばニキビ押している

引きあげて泥をぬぐえばひとの子だ

師の家は柳を折れて小半丁

大森 娛句樂

年の暮そんな呑んでいたかいな

栄転の汽車は山田を後に揺れ

酔いどれて出るしゃっくりに節がつき

危がる児を抱きたがる隣りの子

茄子の牛胡瓜の馬も漂える

附箋つく暑中見舞へ詫びたい気

馬鹿にした挨拶今日も呑んでるの

選挙後の村で鶯だけが啼き

蠟燭も用意してある宿につき

呑代を妻へそくりで精算し

殉職の時計握った痛ましさ

お汁粉屋餅がふくれるのを待たせ
僕だけに居残れと云う酒があり
晩酌の猪口にも春の舌ざはり
読み直し母に手紙の意が通じ
若やいだ妻は叱つて酌いで呉れ
栄転は左が過ぎてはゞまれる
ブラットで歩巾を替えてまだ送り
誰か来たらしい団扇がある座敷
田の中で吞ますに蓄める友は老け
こんな時出ねば幽霊などは嘘
パチンコ屋泣かせた話大きすぎ
大晦日入智恵通り子が喋り
水車小屋市に編入は知らぬ音
石段も袂も長い春霞

岡村牛耕

重鎮と云われ目方は十二貫

善人であつた証拠の借りが出る

まあいゝやそのうち嫁く気になるだろう

警察の手帖俳句も書いてあり

冷やゝかに致死量ですと医者はい

オーバーのオの字も言わぬ娘が憐れ

迂濶にも酌もようせぬ娘に育て

たまさかに夫婦で行くが葬儀なり

片っ端しから団扇破いて子は育ち

水打ちが早く歩くと云う目つき

ススススス晷かように歩くもの

街録の自分の声を待ち構え

お隣の喧嘩ラジオを止めて聞き

昼間見た白衣がパーをのし歩き

校長が本気になって座が白け

苦勞したね易者が云えば泪ぐみ

台風が逃げて大きな釘を抜き

直ぐ死ぬる薬と言えば後へより

厚子夫人市場へ来ても会釈をし

口程にない姑の鎌の音

小姑が一番切れる鎌をとり

首を切る相談チビリチビリ呑み

慾がないと里の母親齒痒ゆがり

ウマウマが言え出した子へ手ぶらで来

あっち向いて居てね鉄砲風呂へ脱ぎ

香のけむ喪主の衿脚きれいすぎ
再軍備又糺パンを喰わす気か
お掃除が趣味で姑嫌われる
着物とは言わずお花見止ましよう
割勘で下戸は手ばかり叩かされ
花の下もう踊ろうか踊ろうか
一滴もいけぬ夫を小馬鹿にし
酔っぱらって殴って欲しい時もあり
親切を受ける決心まだつかず
裏町の詩人の菜っ葉虫が喰い
屋のパー蜜柑の皮を踏みつける
返事などしては居れない子沢山
履物を揃えたりする児に育て
御見舞に行けば廊下でふざけとり

岡田夜潮

人前で蚤をつぶせる齡となり
倦怠期妻の無趣味に腹が立ち
預金部へ首の財布を外すしたり
座布団を床屋お次へ裏返し
禿頭さかなの骨のように分け
拳手の礼又ぞろ流行って来そうなの
後妻だとも云われ女中だとも云われ
後任にアチャコ先生に似たのが来
気障な人かけたで涼み台へ来す
貸本の中から異性の髪が出た
同権の味も知らずに妻は老い

意見して帰れば妻に意見され

子沢山番号に似た名を付ける

気まぐれに下ったまゝの氷柱なめ

年賀状女將の書いたものでなし

唄わせる児を舞台まで抱いて出る

食い残し集めて末座まだ唄い

干竿を外す女に花が散り

新緑の滴る中をカメラマン

欣然とエレベーターに足を入れ

枕木となつて一生終らんか

表彰は嫌だが洩れりやうら淋し

ポーナスの空いた袋を妻捨てず

朝露に濡れても滞納だけはせず

御曹司膳に向かつてふところ手

用がありや電話をせいと靴を穿き
貯金帳母に見せたい女工なり
舞わそうとすれば舞わない女の子
ふざけると声を出すよと予防戦
出勤をまだせず社長菊作り
預金部のお客みなりを云つとらず
三味線の稽古へ集配投げて去に
先生に違いないのが踊り居り
先代の遺した碁石数足らず
手間取った化粧襖がさつと開き
総入歯膳に置かれて寒うなり
春の雪解けて流れて家鴨浮き
臍の緒を入れた抽出堅過ぎる
添乳して寝たらし涼み台へ来ず

川村好郎

偽らぬ姿めしやの列に立ち
簡単に辞める若さのうらやまし
診てくれてそれから長い碁の話
あぶないと握った母の手の堅さ
盃洗へお酒を捨てし目もありし
売上げを一寸のぞいて出る主人
決戦下お琴の糸も切れたまゝ
師を訪えば焦土に変わり左記移転
べんちやらへ旦那悠々風を入れ
左り前電蓄今日も派手に掛け
考えておこうと言ってくれただけ

近所への意地が八分の非を買い

だし昆布のようなネクタイ今日も締め

市民住宅映画セットのように建ち

やりくりのうまさを妻に聞かせとく

案の定掛けのよらない旅帰り

謹賀新年金は返えすと書いてなし

恩人が国民服で訪ねて来

子供だけ釣った魚と信じ切り

いゝ妻よノートちぎった文なれど

こどもの日この子は今日も靴みがき

道問えば女一足あとえ寄り

ハイキング彼女弟を連れて来た

値切られて飲ませてやっとな手なり

ブライドがあるわと女給ぬかしたり

子供等が待っていますと妻の文
立退いてほしい二階に子が産れ
パンクしてますと自転車貸さぬなり
恩は恩私は夫が御座います
督促状大きな声で笑っとく
昔女中おいてましたという女中
女優になると上京したがそれっきり
妻の夏洗うては干し洗うては干し
五十からですよと女將におだてられ
やいとやで昔なじみの妓と出合い
自分でも三等重役と知っており
集金が出来ずチャンバラ観てかえり
お嬢さんうちには過ぎると断られ
貯ったら手を引く二号とも知らず

台風へ釘も打てない亭主持ち

御遺骨と一緒に下船りて拜まれる

簡条書きにして課長は叱りつけ

暮しよくなつたか姑と仲がよく

不渡りのない散髪屋のうらやまし

故郷はよしカビ臭ひ蒲団でも

このまゝで別れましようと女は強し

常得意ないのに公益社よくはやり

春雨へ女房と濡れるあほらしさ

途中下車ポスター程に咲いていす

○トレルマデカエルナと部長から

生活力だわいや愛だわと姦しい

さてとなれば逃げるひきょうを男持ち

河村瑞川

珍客は十年ぶりを繰り返し

愚痴云わぬ人の強さが今判り

もう一人診ないと米の買えぬ医者

浮草よなどとちやかり溜めている

植木鉢せめて泥でも取ってやれ

転宅へまだ見ぬ土地を喜ぶ子

年賀状書きましようかと好い息子

偶然に競馬で出会う間の悪さ

待望の背広着た子を母見上げ

注射してきて庭先の梅をほめ

笑ひごとですましてくれた父の味

どの駅も蛙の声の終列車

茶柱をそつと袂へ入れた母

立会いはドイツ語で誤診庇うなり

あの人が来やはったかと幕のあな

お誂えのようですと服屋着せて見る

辛いこと何でも云つてよと姉芸者

皿を見ろと云わんばかりの刺身なり

一寸飲んで見よかと本復うれしそう

長廊下こっちどすえと引かれ行き

奥様と云われて彼女その気なり

仲人の家風くゝに怖気すき

女客だけには留守居応接し

恋人を蹴飛してみたい好い砂地

河村日満

落第へ貧しいからと子もひがみ
妻と来て市場の中も歩かされ
エンヂンの如く少年疲れざる
残骸のようにボートが並ぶ浜
ランニングもとの少女になつて去に
母親の看護は医者を驚かせ
通信簿意地がないにも程があり
連れ立って出た目を霞までが降り
働いてきた手大きく子に見せる
曇なぞない正直な答えなり
無一文でも青年は家に居ず

十二月金の出るのがよう目立ち

道草を食う蟻もおりほおえまし

見栄坊な僕だけ損をしてかえり

酒買いに行く役弟へ譲り

宿題を父は結論からあわせ

真ッ直ぐに戻らし酒が買ってなし

病人も寝て居れぬほど雨が漏り

二代目は刺される程の才でなし

労働歌重役室の窓閉まる

生命保険うちの大蔵省は拒否

絵でカルタ取る児と春の留守居する

三度目の酔元日も昏れかゝり

この人も師を呼び棄てに趣味を説く

妊産婦罷り通るといふ姿

新薬の値に病人が断らせ

予備知識仕込まれて出る座談会

焼香へ遅刻したのが先に立ち

もう少し寝ててと食事準備中

金貸してこっちの世帯まで困り

すぐ抱ける姿勢で女寄ってくる

もしくもしくこっちに用があるに切り

天皇陛下万才戦後なりとても

父ちゃんは寝てる年始の誰か去に

一月一日出勤の判ベタと押す

何日の頃からか唄わぬ人となり

十月の四五日に田の変りよう

死を悟る人の言葉の静かなり

母の日を母は笑って飯を炊く

実印を押したを母の不安がり
学歴をつけねばおかぬ親の気の
女房に値札の付いたまゝ渡し
姉さんのあとへ人権無視されて
病妻へある日はアチャコほどおどけ
外聞もなく宅の子へ拍手する
底抜けの騒ぎ費用は会社持
挨拶へ顔をそむけた気の強さ
言い伝えますがと夫人引き受けず
紙切つて見せて鉄の包まれる
長生きをせえと叔父にも見離され
来い／＼と云うてたほどにもてなさず
酔うたんで言うんやないと念を押し
出せば出る力を火事に教えられ

亀山晴峯

亡父の好みがらくたながらすて切れず

よちよちと踏切番へ弁当くる

水族館うなぎの顔ににらまれる

診察の手許母なる眼で見つめ

子の蚤母の蚤行ったり来たり

バーの隅人魚の額の古ぼけて

でしゃばってそれほどでない意見出し

久々の友乱髪のまゝで来る

老夫婦孫に内証の餡もあり

艶歌師も昔のまゝで来る湯崎

服替えて又買わされる赤い羽根

万引が芦屋の父の名を云わす

さようなら云えずアベックまだあるき

人よりも大きく撞いて見たい鐘

誰れを待つ娘か街路樹の皮むしり

支那料理献立表へ指で云い

満ち足りて女すやすや夢に堕ち

雷を屁とも思はぬ子が育ち

めしと書き提灯まがったまゝで更け

幽霊が楽屋でラムネ飲んでゐる

本当の自分の時間持てず死に

霧の阿蘇こゝが峠の泉ざかい

宝くじ机一つで店が出来

金井文秋

ロングよしショートまたよし好きな娘の

月二分の無理は倒れてからわかり

生仏ではない証抛酒に出る

入院の妻に月賦があつたのか

どうせまた棚上げになる金を貸し

愛人に頼もしがられ遣いこみ

ヌード集次のお客も見るばかり

十六夜でよし飲むだけの君と僕

ボスに似て弱きに強い税吏員

美容体操そんな時間が主婦になし

女房の家出が致命傷で死に

役不足学芸会の事にさえ

皇太子のプロマイドとは世が変り

署名簿が漢薬程に効いてくる

ゆっくりと大阪弁を読み直し

かゝる世に手術してまで子が欲しく

酒癖が知れて祭も呼びに来ず

子に玩具親は子供を玩具にし

覚悟した首を労組承知せず

御利益の神様土地の人知らず

蔭の声気にすりゃ幹事勤まらず

晩年の運も逃がして駅に寝る

ラッパ呑みあとで世話などさしてなや

立読みの間に止んで傘忘れ

間借りだと知れる仕切りのベニヤ板

神谷凡九郎

青春のよさはあんなにも笑え

女先ず雑談からの事務初め

嫉妬するならもつと気嫌をとりなはれ

官判一つで書類らしくなり

警笛が生きる生きよとさゝやいた

嫉妬やおまへんさりげなく申されし

感謝してるんだと言えぬのも夫

如才なさそれが女にももの足らず

主婦として廃物までもすてさせず

ばた／＼と動き軽うに見られてい

名声が人の自由をひくくゝり

吉日へ神主今日は立ちどおし

男の子隣りの鯉を見上げてた

見えすいた遠慮やたらにしているよ

漫才の二人も外遊して来てた

おもむろに開く弁当箸がなし

子沢山だったに養老院にいる

颯風の街へやっぱり渡り鳥

今頃になってぼんくら膝を打ち

着かざって花と争う気のあわれ

啄木の見た掌もこんな掌だろうか

アドバルンヘナくくくとたまれる

質札のぐっしょりぬれていた死体

恋人が振り向かぬまゝ小さくなり

機械化を憎む仲間に僕も居る

北川春巢

一人茶を飲めばみな飲む子沢山

宿替に昔の煙草巻器出る

通勤は須磨も明石も読みふけり

おさらいの三味ヘワンピースで坐り

白髪染洗えば孫にこわがられ

栄転の荷に琴もあり婦長さん

金さえあれば気の利かぬ僕でなし

お祈りをする黒髪の長さかな

流石吾子十対一をパスして来

スキー靴問われもせぬに値段云う

此の島の景気を瓦屋根に見る
半ズボン男はとくやなと云われ
貧弱な乳房を出して泣き止ませ
小男の宿のどてらへ手もつけず
招待の歌舞伎の隅で胃散服む
相談に来て結論を云う若さ
急逝をしたと税務署へも知らし
初詣まっすぐ帰ることにする
奥さんと呼んで女房に猪口を差し
病院長夫人は家で灸をすえ
頓服を上げますと医者あわてない
のりつけが嫌いで女房せいがなし
テント村ポスターにない雨が降り
たんすの古さおふくろの年思う

女教員三人シャベリく去に

子を持たぬ膝は荷物ものせぬなり

尋卒を売り物にして立候補

素人のなすびは十一月もなり

菊自慢天然色で撮っておき

愛人の母へ奉仕の文楽座

記念写真眼だけ見えてる写りよう

帽子屋の目にノーハット多いこと

父と来た夜店なんにも欲しがらず

生字引英語違ったまゝおぼえ

奥さんくとかつぎや同志なり

お酒でも出せと病人気を使い

パンの耳好きなのも居る子沢山

君もかと気胸で会うて悪びれず

百坪の土地幼稚園思いつき

横綱の病名までも知れ渡り

日未だ没せずネオンのとぼけよう

錦着て帰る故郷の駅小し

人前の二人は標準語で話し

もう一間欲しい〜で年が過ぎ

窓口は洒落の分らぬ男なり

急逝へ飲んだ思い出ばかりなり

サンドマンの広告を見ず顔を見る

お守りもやっばり高価い方を買

歯に衣をきせぬ社長に鍛えられ

水道の漏りもよう直さぬ亭主

送別会主賓が下戸で頼りなし

君と飲んだ店もパチンコ屋に変わり

木村孤浪

式挙げて十日足音もうわかり
釣りよ暮よ謡よ庶務の忙しき
あでやかに女子工員の拳手の礼
まごころは荷造紐のよせ集め
遠足の朝のり巻のはしをくい
遠廻りの愚痴おやしきの塀がきゝ
近道はよそうに父の老を知り
痼癢の筈の先きの糸の屑
靴みがきストッキングへ眼のやり場
子が見てゝメーデーの父少してれ
あした立つ子へ荷造りのフト寂し

天ふらはうちでなかつたのかと靴をぬぎ

わが家の玄關を訪う忘れもの

正札がかすむガラスへ息のあと

お転婆を三日封じた高島田

ミスポリに少し笑えと彌次がとび

残高を見い／＼チビリ／＼やり

何やらんくわえてひよ子逃げ廻り

工面して来たとは見えぬ演舞場

復員の記事にめがねを添えて出し

いゝ女街のピッチャー手が狂い

今日あすは予定があると御役人

何の因果か西瓜はつらに値を書かれ

賽銭は度び／＼笏で押し込まれ

ごゆっくりにつまらなく済む宿のめし

木村十悟

青空へ蕙²円で借り

集ると今年も税と飲む事と

天理市を法被の衾にしてしまい

風呂敷と言う縁談へ箆筒くる

監督と云う肩書で云い寄られ

保守系の親爺で一家恙なし

酔うている証拠豆腐はさまれず

方向をかついで儲け取り逃がし

無理に無理重て若手へたばらす

源氏名と共に生きてる日本髪

御早うと色衾午後へ起きてくる

靴磨きブラシで客を差し招き

あくる日はとぼける事にしてる酒

羽子板にまだ生きて居る成駒屋

一尺を動いて歩行器騒がれる

派手に再開パトロンが出来たらし

木村水堂

七人を支える靴の砂ほこり

あきらめて添うてまんねと負けていす

パチンコに行く口実を見破られ

追放が解けてまた要るモーニング

御本家の格で養子が座らされ

局長が好きだからする野球なり

親の恩オムツ洗ってわかりかけ

久潤の友に養子を羨まれ

かくし芸もたぬ夫で一家無事

免職にならぬ程度でくだをまき

モーデーに参加もせずパチンコ屋

自家用で昔の恩を返しに来
御用聞き養子と知らぬ世辞を云い
勉強の出来ない順によく走り
骨のあるところをみせて馘になり
女史という妻をもつて不仕合せ
どうみても女は損な慰安会
産褥へ自炊の腕が役に立ち
聞込みと違う養子の酒の量
俸給の高い順から出張し
かけ出しと思えぬような穴をあけ
自由党支持する程に金が出来
薯のツル喰べた時代をもう忘れ
橋の下こゝも生抜く煙あげ
信用があつて私用を云いつかり

どん底の暮しの中のお燈明

愛情が鈍れたらしい三通話

父ちゃんが叱られたのをふれ歩き

元も子も無くしてからの善後策

何事ぞ女一人を持ってあまし

拗ねているときの養子は胡坐なり

仏様にまで肩書をつけたがり

薄情にされても妻の道をたて

幼稚園に行ってもらうに機嫌とり

再出馬汚職の味が忘れず

養子の悪口へ親娘の気がそろい

云い分は養子の方がたと持ち

サービスもせずにはやきもちだけはやき

恩人に弓ひくようなブラカード

木村千容

忙中に閑あり時計合せとき

直感の鋭い人で寄りつけず

後悔はせぬという娘の目が淋し

言わでものことで反感ばかりかい

この辺でもう酒にしようく

病い抜けしたのか接木思いたち

他人にはまさかと思う程やさし

坊ちゃんの社長はオベンチャラが好き

処世術母は阿呆になれという

方便という嘘俺は嫌なり

たてついて見たが比重がちとちがい

シャバンヌの漁夫は釣り上げそな構え

守銭奴が口頭痛にリョウマチス

一生を休暇の味も知らず老い

老妻のやたら気にする古畳

二号でもおくと本家は殊勝なり

電報で首を切られた過去をもち

おさしみのつまによく似た存在さ

雑巾はひからび主婦は今日も留守

はいったら困るが試験受けさせる

先生はうちへかえってきけとにげ

祝辞にもちよつびり自己を宣伝し

三人の孫へおかきが焼き切れず

新築をすればあいつもかといわれ

ちやつかりやなの^に売食いなどといふ

酒もつてこいに保母さん汗をかき
独酌ですみませんがとつけてくれ
忠言はいと簡単に否定され

親馬鹿もさすが秀才とは云わず
もう少し生きろと背広出来あがり
福引の種買いあさる暮の街

一言居士今日はいうなと釘打たれ
指定席隣りは芸能評論家

父生きていたらと僕の年をきゝ
もう杖をおつきやすえと京の友

善人の見本否とはよう云わず

税務署のくきみがなくて親まれ

まぜかやして見たが油と水だった

雷の予報を秘書はしてくれず

木下幽王

おっちょこちょいの客からちよっぴりもうけとき

児がないので夫婦げんかも長期化す

歌舞伎座で妻の猫脊をたしなめる

くすぐったや妻がマダムと呼ばれて居

留守と思わせちゃならんぞと旅に出る

酔どれに主義があるのが面白し

踏切番の眼にはいらちの人ばかり

女房はひゞがあつたを主張する

ひまだから床屋へ来ればこゝもひま

あの時は別れる気でしたとしゃあ／＼と

だから飼うなと云うたぢゃないか金魚死に

俗談と別な声してお経あげ

社長より五寸も高く気がねする

雨だれは肺の中までぬらすなり

つちつまが合わず漫才歌になり

卒業写真自殺したのが前に居り

土地の値も知らず大根ひょうろく

人格を無視しておでん屋へ誘う

とゆが無いので雨が奏でたドレミハソ

たんつほもしびんも親しいものうち

血を吐いているのにラジオは打ちましたく

病人が時々調べる貯金帖

葉桜の頃に割勘云うて来る

三べんに区切ったあくび母も老け

経済学原理の通り破産する

女学生おもちゃのような子を産んだ

拾ひ屋になれる素質をほくも持ち

追放解除ひげの白さが目立つのみ

謙遜が過ぎて相手が腹をたて

北風に首だけ前へ前へ行く

ふんぜんと席をけつたがだれも止めない

映画なら伴奏がある兎の危篤

女アナウンサーが姑みたいなことを云う

女房も声をあわせて値切るなり

ガラ／＼も大人が振つたやかましき

かゝる人ありしと墓標に刻まんか

税務署で息子の戦死も云うてみた

奥様と奥様敬語でけんかする

もの云えば金が要るなりだから寝る

菊 沢 小 松 園

年上の女とくゞるてっちり屋
父親の勝手に決めた母が来る
いゝ度胸本家の前へ店を出し
名作の使わぬ太刀となりにつけり
妻として来れば芝生へもう座せず
金のある阿呆へ嫁いで行きました
平常着で来たのがいっち泣いてくれ
月賦だんねんとやっぱり嬉しそう
湯槽から女と見てるいゝ吹雪
若草山風のある日と見えぬなり
懐ろ手宝くじ屋へ振り向かず

父として四角に座る癖が付き
何時の日の俺に御光のさすことか
ひたかくすすべを女の子の覚え
泥捧の逃げた窓から首を出し
金のない友達ばかり附いて来る
パパママと言わせ三味線習はせる
落ちぶれた友へ御櫃のまんま出し
眼鏡ごし貸すとも貸さぬとも云わす
このくらし啄木ならば歌詠まん
いつまでも待つて居ますを持てあまし
その努力褒めて手落ちには触れず
齡不惑そんな笑顔で欺されず
副業の方は養子にあてがう気
独酌の父へ長女は羽織かけ

菊田いさむ

黙否権やくぎの義理を立てゝいる
べんちゃらがまた失業をしやはった
考えておくと警察云うたきり
一人者茶漬の音もわびしそう
よく働く娘のしもやけをふと気付き
針の穴程の浮気に嫉妬され
曲乗りをしてあほんだら溝へ落ち
隣組しぶちんがいて寄附がもめ
夫婦してしゃっくりが出る面白さ
ネクタイをゆるめて酒へ腰を据え
やりくりも馴れてますわと後妻くる

未亡人俸を頼りきる姿

愛人は一般席から焼香し

帰郷する棧橋母が揺れて見え

最後までベスト尽したお人好し

寝つかれぬはず盛り場の裏の宿

忙しいからと素顔で見送られ

停年へ勤勉でしただけのこと

喪服ちと借り物らしい坐りよう

岸
南
柳

夕立ちへ遂に散髪刈ってゆき
お隣りえも頼んでかえる弟子の母
人生に因縁と云うよい言葉
人生を紙くすのよにアプレの娘
おのが無理通した後の淋しすぎ
自惚があつて世間へ顔も出し
ありそうな運も掴まず髪白く
断ち切れぬ戸籍の妻に子を思い

黄瀬美秋

仲よしでどっちもお嫁に行かせぬ気

機関車のたまにひとりで走りたし

愛人へ納税預金まで貢ぎ

母屋から珠数借って行く新世帯

花嫁の悲恋に泣いた顔でなし

投売りの眼にくらしいふところ手

いゝ金を取るので嫁に出しそびれ

スクラムを組んでマッチをやっとすり

親切な医者で余計な注射もし

振付けの先生の手の無遠慮な

改札を横向いて出る太りよう

おなら一つ出すに医博のお手を借り

青白いことだけ秀才型になり

夢はもう捨てた姿の小商人

急病へお医者 of 酔がさめ切らず

膝まくらそばに枕のあるものを

里帰えり充分口止めして帰えし

カンニングした入学へ祝が来

斜陽族さすが式辞の堂に入り

以下同文にして欲しい式辞のつゞくなり

貸付係御中と書く年賀状

役得の靴が気になる程に鳴り

猫も来て横になつて枕蚊帳

モダンバレエ見ているような瑩狩り

浪人のなに言われてもカンが立ち

落ちぶれて燈籠こけたまゝで売り

貸ボート橋の上からひやかされ

観光地岩一つにも気を配り

三条大橋舞妓さんの袖にふれ

金持ちにまたも白痴の子が生れ

債権者の方が揉手をして頼み

診察場次の裸も痩せている

横着な方の鶏からつぶされる

サーカスの芸が泥捧欲しいなり

黒川紫香

島原を巡察はにべもなく通り

日めくりは1と出ている大晦日

コンパクトお早う位でふりむかず

搔きわけて降りれば一つ前の駅

貯めている課長将棋も知らぬなり

さて病んで見れば掛図の古くさし

濕布して親友約束通り来る

蟬持って客へ挨拶する子供

妻の死にあう

朝さむし今日から減った米をとぎ

案外に遺産なかった一と七日

妾とは猫の座布団まで作り
腹芸が出来ないまゝに停年さ
怒るのに鉛筆がいる課長なり
如才なく妻をお宅へ伺わせ
水引いた様に法事の客が去に
銀行の門燈やもりがくる暑さ
お芝居の様に船頭の肩に月
兎も角も女きれいに死にたがり
みんな寝てしもうて母のいゝ月見
旅の雨しばらく女中が話しに来
しょうもない事で夫を呼ぶ若さ
ライバルにコーヒよばれる羽目になり
灯を貸して夜警も探す落し物
若後家の喪服一番よく似合い

ざあますとざあます住宅地への道
お茶のんでいるのが代筆させている
片っぱの下駄で蟹とり帰って来
養生をさせない電話またかゝり

国 弘 半 休

上役を三振させた草野球

姫ばかり通るところぼす靴みがき

秋深かまりぬと駅長室焚火

事前運動はつきり年賀はがき来る

ガミ／＼と言って仕舞えばもう正午

立ちどまるところが絵になる安芸の国

盲点を突かれたと云う自己批判

たまに着た私服へ受付念を入れ

宿題をやる間ない程ラジオ鳴る

気負けするほどに女の寄りかゝり

天高く運動靴を買わされる

長女十七ブク／＼肥ってドウシマシヨウ

酒の座は親父おや爺と親しまれ

親権を放棄したよなさんをつけ

縁あつて職場結婚共稼ぎ

援助の手伸ばし過ぎたり不義なるか

客筋が良すぎて板場今日も閑

新聞が一日おくれて着く閑居

精神科母がのぞけば素直なり

人造米二百十日も知らず出来

責任を終えた顎紐そつととり

期待程新婚甘いものでなし

只踊るだけで良いのと誘いの手

日と共に春蚕の桑へいどむ音

小西無鬼

信心の前を子供が走り過ぎ
洞窟の様にして住む材木屋
井を食うにも百貨店へ行き
鼻からをシヨールで巻いて待って呉れ
打水もして請願の巡查なり
首すじの扇子が似合うお寺はん

七才の姪の死に

蓮の葉の上はダンスに狭ま過ぎん
みじめさは未だ軍服で通勤し
貸文庫誰が閉ぢたか蚊の栞
銀行の出納籠の鳥に似て

女なら身を売る術もあるとやら

同類と思われまいと追越した

名曲か知らねど夜業腹が立ち

脚の線鹿にも似たりニュールック

商才というが動乱見逃さず

うっかつにも闇屋に席を譲りけり

打算的に信仰するも女にて

パチンコの前で子供返しとき

闇米で儲け保全会でとられ

出張に巡査も革の鞆持ち

無理をした金とも知らず荷は届き

老妻にくすぐったくも甘えられ

もどかしくなれば朝鮮語で話し

ストーブへ抱きつく様に寒がり屋

小林文月

演習の斥候柿を一つもぎ

階級の違い靴にも見せている

召集にわすかの借を払って来

ボタン一つ月賦のすまぬうちにもげ

年賀客一寸一枚撮られてい

卒業は自己の努力とのみ思

入営の朝小鳥にも餌をやり

バスガール友には別な声をかけ

父の忌に孝足らざりし足らざりし

女事務員退職

美しき小鳥の一羽樹を離れ

片親となつて孝行らしくなり
乙女ダンス昨日の給仕とは見えす
孫悟空の絵本齒科医で半分読み
模型機が一枚割りし窓ガラス
靖国の神にあなたと小さく呼び
消防士鎮火と見たか煙草つけ

水間寺お夏清十郎の墓

忘れし碑もよくロケの役に立ち
一応は螢の光でケリがつき
妻病みて野菜の高いことを知り
妻何を祈るか時間倍かかり
二号宅の勝手口より散歩に出
ポーナスを疊が屋根が待つて居り

小西雄々

人間の慾でたまった古道具

保険屋もいそいで去んだヒステリー

年度末歩をつくように移動させ

ポマードは二年前のがある詩人

流行に遅れる妻をよしとする

税務署の近くと聞いて移転止め

ライバルが富士を喫うから富士を喫い

食べ物の事にもふれる帰朝談

綺麗好き猫の素足は気にかけて

忙中閑ありパイプの艶を出し

当選三回自家用車ほしくなり

小池しげお

もう妻は肩を叩かすようになり
五人共みんなよう似た人夫なり
孝行な夜警死目による会わず
下座もう上着を脱いだ声になり
借りて来た出刃庖丁も切れぬなり
大阪へ来た団体は走らされ
松茸狩無理な所で踊らされ
幹事の浴衣一つのこして風呂へ行き
子の花火父も一緒に叱られる
恩人も金で精算されている
浪花節かけてもろうてサンルーム

老いらくの恋マフラーが派手になり
ニコヨンの焚火けむたいまゝあたり
切っただけ短うなつたへボ大工
いける口揃うて五時にやってくる
北浜へくれば単価が大きすぎ
奢られる弱さ奴が好きといゝ
炎天へ馬子もおんなじ水を呑み
看護婦に治してもろたようなもの
食堂の子食堂で喰べさゝれ
漬物にされず大根花が咲き
仏壇も買えて操を誓うなり
既製品原価を云うてまけてくれ
土木部長案外肚のない男
新婚の当座はガラスばかり拭き

後藤梅志

蚤の市私服も欲しいものがあり
就職の首尾はガラット門があき
恩を知る点では犬にさえおとり
悪酔いの背中板場が来てさすり
朝起をいゝことにしてこき使い
パン屋ばかり殖える世相も面白し
瓢々と夜警のあとや先になり
ボロ家で根性までも小さくなり
古本屋暗い所で何か書き
うまいこと音痴を老妓糸にのせ
とん／＼にいくよは親の嘘と知り

搗べりというのを女房だけが知り

北浜の客早口であしらわれ

正直に死ぬものぐらいあつてよし

酒ぐらい呑めと野心を捨てた父

嫁とつてぶらくして置屋の子

帯固く締めなを息子うるさがり

乱能を見るのは女弟子ばかり

精勤な車掌西陽の窓をしめ

川風のつらさ涼しさ靴磨

頂上へ出て鶯を聞き直し

堂々たる体軀ホテルのボーイなり

手錠とる方が悪人臭いなり

声優の写真サラリーマンに似て

アル中の箸から海鼠すべり落ち

暴君が子の暴君をもてあまし

呑助のくせでタバコを置いて去に

老け役で落ちた人気をとり返し

老夫婦大阪弁のあくがぬけ

もげそうな釘へ電話帳をかけ

じれったい人とウイंक二つする

雪国の樹海大きく人を呑み

忘年会空気濁したまでのこと

叩き売からも甲斐性なしにされ

自転車で来て秋草に寝転んで

もう秋か古い門標見上げて出

直された癖で謡っている謡

こぼれては咲きこぼれては咲き朝顔の

妾宅へ巡查足音立てゝ開け

佐野ト占

やゝこしい法規覚えた頃変り

甘えたりすねたり女忙しい

同権論口の達者な方が妻

ステップも軽くネオンも春の色

空想も夢もきれいな女学生

見送りの女中テープを義理で持ち

観光地ただで遊ばす様に書き

酒女汚職の金は羽根が生え

職安所係も辛い雨が降り

夜店の灯金魚の水にとけている

佐野白水

もう一算おけばすむのに停電し

クーポンへ酒は大阪から持参

飲ませとは云わぬが役人五時に来る

女事務例外もなくみんな飲み

煙草吸うことで処女まで疑われ

混血児父母をうらます聖書読み

次の客までを年始は飲まされる

滑る気で妻もズボンをはいて出る

商人に期限を切って欺まされる

日曜に来る雷報は会社から

京都弁でやんわりのろけ聞かされる

君に貸す為めに蓄めてる金でなし

それ程に着たけりゃ芸者にでもなりな

落選の候補へカンパさせられて

下落したイチゴ家でも買うていた

毫万円帯に短く預金する

社用族又山中へ行く話

香港の手紙文珠の智恵で読み

うぬぼれはわたしの外にない委員

自殺者の心誘った春の海

社を退めた男がみんな出世して

隣席も長旅らしい胡座組み

日本へ骨を埋めに来たキリン

おばはんと呼んで妓に嫌われる

六甲で滑る写真へ社を休み

ジャン／＼横丁鞆ひったくられそいな

五尺八寸二つに折った御挨拶

商売と知って白衣へ振り向かず

首相また新装開店するつもり

日本の首相やっばり保守で良し

洋服を終生着すに通す母

そんな事あったかと恩人忘れてい

露路口で夜警チョン／＼叩いとき

初詣り下手なカメラへ立たさされる

櫻川不水

嬉しきは袂を小さく打ち払ひ
高らかに歌ひ雪から子が帰り
眼鏡など付けて按摩が桜へ来
ざりくのとこへ女房又孕み
ひらくと舞えば百円札も紙
日銀の内じゃうっかり洒落も出ず
まねき猫旦那の嚏遠く聞き
役人にややらぬと親爺五十過ぎ
洒落くせえ猿かな俺に齒をむいて
風向きを測り賽銭放り込まれ
あな楽しなどと新婦はのたまわす

大掃除の日

稼いだなあどのがらくたも俺のもの

金のない明治生れは放つとかれ

職場大会鰯を食った息で来る

二合五勺だが三合は僕も食い

めっ そうな顔で千円断られ

音に聞く安達ヶ原の夕がらす

かまきりにまさか虎徹も抜かれまい

きせるおさめておなら一発

こすき廻せど山は動ぜず

へそくり溜めて唯我独尊

鍼力引っかく派手なヒステリ

女房のいない夜からねすみが出

精神一到酒は欠かさず

酒田清子

嫁ぐ日に子供扱いするも母
酒煙草きらいやなんて頼りない
スプンレース校長びりから馳けてくる
男手に育つて耳に垢をため
高校になり抽斗に錠をかけ
パトロールみんな起して遠く消え
八の字にペタルふんでる牛乳屋
終電車シヨールの中で子は寝入り
試験前炭つぎ足しに起きてやり
はさまった夕刊で知る妻の留守
大掃除電球拭いて終りにし

故 阪 田 良 坊

医者去んで布団かすかな動き見せ

芸事が好きで一生後家ですぎ

不精髭の天皇様を嬉しがり

暴力を否定しながら再軍備

石段でよっほど閑な奴が釣り

人並の事はしたとてこぼす母

処女作がなつかしゅうなる齡になり

パチンコへ会社のもやもやはぢいて来

へそくりのまゝでは越せぬ大晦日

芙美子さんめし炊きかけのまゝで逝き

隣まで襦袍で脉をとりに行き

戦友の骨を届けて愚痴もきゝ
同権も考えにない妻の位置
愛情の問題ですと妻のヒス
駅長の帽子坊やが冠って見
旅馴れています 駅弁次にする
真相は実はこうだと坐り込み
女教師と並び足巾あわしてる
無理やりに吞ませて後はうるさがり
溝板をはぐれば春の匂いする
凡人のすべてを利子は支配する
葉桜の候に候呑み仲間
水族館あんな処にタコが居る
不良にも云い分がある 刑事室
エチケツト無駄な遠慮をして戻り

清水白柳子

退屈の煙は消える迄見つめ
短篇を書けばホテルに用はなし
芸人と芸人洒落も言わず呑み
恋すればこそコスモスの線が好き
砂浜の熱さを走る瘦せっぽち
恋もなくただ浜寺の砂に焦ヤけ
辛抱をする気涙が一つ落ち
小切手は胡座の手から渡される
ペンキ塗立桜とんじやくくなしに散る
常会でその学歴もうたがわれ
制服で来る宝塚母を連れ

がいせんの目に白足袋のなつかしく

墓やや傾きてありぬ涙流るる

姫だるま道後の妓に似ておかし

一寸した血はなめて置く大工の手

鮮人にも教えるも夜の汽車

総選挙昔馴染の名を見つけ

菊活けて一ト時慾を忘れたり

珍客はむぎ飯炊いたとこへ来た

午後五時の海は泳げぬ奴ばかり

雨の日ははく靴が無く本を読み

ぬれて行くには軍服が役に立ち

胎教と言うに朝からがみくくと

大阪市南区いまは蚊帳が要り

笑わば笑え面影を抱きしめん

スタンドで押えて帰る置手紙
大阪でこんどは俺が鱈を食い
春日遅々として仁王さんねむくなり
しゃべるだけしゃべらして役所あきまへん
誘惑をしたかされたか薄化粧
舗装道路高下駄をはく道でなし
子守させといて落第を叱りつけ

次男死亡

南無阿彌陀在世四十一時間
手術した跡を海水浴で見せ
お出かけに夫婦とも要る靴亡り
豪快に飲んで墨こんりんりたり
流連にうまいものなしひるを起き
一度なりたや税金を使う身に

寒い日は寒いとぼやく倦怠期

あらばかり探して会議はかどらず

雁の列乱れ強盗寒くなり

よい気味だとは妾宅が小火を出し

待っていたように客席掃き始め

仮の社務所で鳩の巣もなし

暴君は音のしそうなものを投げ

直線の素直さ伊勢の御社

恩のある人の娘をきらい抜き

清 水 望 峰

奥さんの好みで女中着せられる
ながびくと思てか見舞おちついて
お巡りと話せばみんな見て通り
仲のよい夫婦耳打ちばかりして
寝てる首しめられそうな倦怠期
娘の料理ハカリを近所からかりて
御堂筋巾見なおしている夜明け
住みついて見れば名所もただの里
こおろぎの他は我が家へ来てくれず
私鉄スト動物園へ足が向き
ワントンの笛が柳を通り抜け

新川博也

社説まで読んで勝気な女事務
母の供地下一階で待たされる
夕焼ヘビルの五階はペンを止め
釣革に両手ですがる疲れよう
網棚にアララ醤油がもれており
母は母なりにお顔が広いなり
女学生席をゆすっておかしがり
旅という昔のことばなつかしい
表札もかえずおやじの一周忌
旅費つきるとこまで行人行くつもり
生きることくらいと末子たのもしい

何かこう矛盾だらけの若さ抱く

白墨へ先生の咳まだ止まず

定紋へ母に小さき見栄があり

素通りを叱られもって猪口を受け

奥の奥しかし一軒借りました

ふところで財布にぎって飲んでおり

日傭の群シュクくくと朝に行く

本あさるゆとりうれしきくらしむき

墓参りだけはくくと母老いぬ

長男の胡座へ母は異議もなし

相惚れへ母はジイワリ意見する

涼み台握りたい手がよく動き

恩返しお金ですますことにして

紅一点すごい拍手で立たされる

街路樹の皮をむいてる待ちぼうけ

にぎやかな客だと思ふ屋台店

踏台にされて停年近うなり

あっさりといふられてしもたガシントレ

またたよりとだえて母の気をもませ

ふるさとの水母親がくんでくれ

貫祿は廻転椅子で寝てしまい

左前またもう一人ひまを出し

ただ生きて来ただけという倅せさ

他人目にはヒスとは見えぬ美しさ

下山清潮

三男はさぼって伊吹へ行つたらし

貸したのは喋べり借りたは言わす死に

共産党ほどにきらいな蚊に食われ

偽政者のうそへラジオも歩を合せ

何時迄も遺産で食える未亡人

君見給え女一人は静かだろ

水打てば日課が終る下つばよ

蚊か蠅の様にアプレの人殺し

デパートを廻るに俺は持つ役か

エプロンの好きな女房で先ず達者

馬でスリボートで勝つてランドセル

大阪だ月賦のラジオが鳴り出した
へそくりもようせず妻のふける事
青い目の子とならんでるうちのぼん
御苦勞でしたとは若い課長から
斗病へ入道雲はきつすぎる
貧しければあゝそれでよし冷奴
宿題へ母の程度がちよとのぞき

直原七面山

タンボ、の如く気安く手折られて
砂文字も愛してねえと純な恋
ぶんなぐる愛情なんてありますの
邪恋かは知らねどそこに生きる道
口説く気か男煙草に火をつける
欲情を逃れんための子を抱き
率直な申出女体捻ぢ
女なりけり女なりけり子を孕み
澄してゐるけれどあの娘は僕が好き
二人へ何か言えよと秋の虫
時々は緋の寝巻でも着てみせろ

未亡人心の扉半ば開け

愛された日もあつたわと妓酌ぐ

照りつける太陽に似た彼の愛

螢火のように冷たき女なり

二号とは言わずお世話になってます

未亡人一度落つれば滝に似て

淋しくはありませんかと月並な

何時何処でどこでと女逢いたがり

私生活には触れず二人は逢いつゞけ

脚組みし旅の女よ何処へ行く

逢曳の二人へ星の降るような

女学生乳房で春の風を押し

耳打ちはキッスさせろと馬鹿にして

接吻が欲しいか女目を閉じて

練習をして来た様に嘯けず

洋裁と二つの恋に忙しく

二三年待とうあの娘は十五六

四十で娘の側へ掛けたがり

膝枕の男の鼻をつまんで見

未亡人主人の箸で食べてみる

未亡人子供に詫びる日もありて

気があるか今日も近くへ来て座り

湯の宿で女になつた箸を取り

足音へ惜しいキッスを又逃し

検温の看護婦キッス呉れて行き

キッスだけよと戦後派娘あわてない

マダム今日たかをくゝて犯される

子を抱いて此の幸福よつづけかし

杉谷湖山

いっそもう夜逃げときめて楽に寝る
宿引きのそれから風呂を焚いて居る
淋しさに線香立てる気にもなり
父さんの脊な洗おうかと言って呉れ
従卒の目に奥様の派手すぎて
蓑虫のよっぱど荒れるなと思ひ
故郷は忘れられぬが暮らされぬ
黎明の色失業に強すぎて
罪悪の世を悠々と川の水
金権に征服されて国へ逃げ
貧しさの中の小さき炬燵なる

煙突のむだな煙りと思う日や

だしぬけに海の深さを子に聞かれ

百姓の真似してトマト皆枯らし

ストッキングのまんま炊事の朗らかさ

よく見れば柘榴に似たるトンボの目

腰巻の一枚妻の願いにて

玉砂利の音さえ吾れを脅やかし

パンクしたバスに田植を見て帰り

成人学校に行く相談を妻とする

スナック屋ごときに田舎者にされ

父と母恋し会ってたとも言わず

いつの日に税吏へ笑う日やあらん

結局はボスもお金に目をつむり

招待へ無視されて居る席に座し

たゞくれる物に昨日の臭いする
老いぬれば別な淋しき妻の留守
炊しぐ煙一筋山に忘れられ

比佐良画く絵に似し娘咳き止まず

パンパンと言う名に怖じず昼を出る

抜け作と言われ五人の子を育て

いけるらし和尚衣を脱いで坐し

ネックレス模造真珠でたりる顔

先生の子が赤旗を振って居る

砂丘にも生きる道あり虫の居て

デパートの食堂がよい妻となり

梶原一善

出戻りで悪かったねとすねられる
いゝキミと思うて居たら焼ぶとり

呑ん兵衛でこまりますのと惚れて居る

ヒスの真似したら押売帰ったわ

冗談も云えない妻にくたびれる

さぼってる時ばかりに上司が来

奥さんがこわいでしょうに意地になり

お喋りが来た来た話題さつと変え

つねられて女の謎をやつと知り

二人で写しましょうと妻若し

ジロリッとにらんだゝけで泣きやむ子

道楽の二号の店がはやること
案の定旦那氣嫌を取りに来た
後釜に座る氣子供手なづけて
なりふりをかまわぬ妻を淋しく見
ツギ当てる妻の根氣へ先に寝る
子供でも扱う様に女將さん
こり性もあき性もおる子沢山
男もうキツスぐらいで承知せず
女もう体で喰うの愚をさとり
景氣よくやれに會計ひやっとし
出戻りかなる程ツンとすましとり
金借りて見れば光陰矢の如し
本気で口説けば女はだまりぬ
たくましく土工になって後家を立て

お妾と一緒に猫も首になり

妬き方はこんなていどと教えられ

子沢山泣く子わめく子ふざける子

いざ買うとなればためらう妻なりし

親の眼で見ても長男たよりなし

野荒しの足跡へ夫婦でしゃがみ

なに事ととえば貴夫の誕生日

初雪へあいにく酒は切れたとこ

儲かってくれば旦那が邪魔になる

クリームだけとは妻も老いたもの

孝行をすると今から予約され

うすくは母の職業知ったらし

少うしは蟻の真似でもしてごらん

制服の下は妖婦の血が流れ

卒業の右総代は二号の子

饒舌の返札ならん馘になり

笑ったくとは父の愛

冬空の雲へ鉄骨の只高く

クラス会未婚は私一人だけ

考がえさせてとキッス迄も逃げ

忘れ物だとキッスしに戻り

新妻の末恐ろしい買いっぶり

保険屋の根気が内の人にほし

アベックを二つに割ってヘビは行く

先代の遺業を捨て、パチンコ屋

昔なら一杯呑める今朝の雪

貧乏はいやと二号にでもなる気

長女もう父の甘さを知っており

須崎 豆秋

むかしむかし稼げば楽になりしとか
骨立てたまゝ二次会へついて行き

看板の裏で茄子の花が咲き

降りる客いとのんのんと続くなり

阿呆なこと云うてしもうて淋しけれ

あゝ大空生れては死に生れては死に

文学にかぶれて死んだことにされ

長靴の中で一びき蚊が暮し

病人へみんなたかつて嘘を言い

借金の嵩も流石は名士なり

火葬場は火をつけてから夕涼

児が追えば鳩は歩るいて逃げるなり

直角に質屋の中へ折れ込んだ

ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる

けなげにも家主の犬を嚙んで来た

秋風の中で乞食に拜まれる

ピョイ〜とうなぎを大中小にわけ

橋筋は春の匂いのこうこ巻

エキストラパスを一枚づゝもらい

ストップがわからんのかと怒こりやはり

速よいかな消えてしまふと火事見舞

こおろぎは足を落したのも知らず

元旦だ一二の三で跳び起きむ

すべったたら丁稚にすると励まされ

かけまくもかしこしお神酒水臭い

守り札もろともチボにとられたり

開 戦

モヤ／＼がいちどに晴れたみことのり

塵箱へ突っ立ち上り訣別す

ちちははにめぐりあいたや靴みがく

こんな時えらい坊主も出んかいな

みの虫のなんぼ匂うても壁だった

煌々とすしがぎょうさん売れ残り

均一の中にさみしき荷風集

破防法通過パチンコしてる間に

らりるれろはつきりしない程に酔い

電話口花千代さんは舌を出し

吉田さん三振しても引っ込まず

恋人の坐ったとこえ坐って見

竹 内 圭 三

一泊の旅行へ日本地図も買い

老らくの恋うなぎ屋で飯にする

日給をはたいてかえる市場籠

あゝしんどかったと温泉から帰えり

相合傘きれいな虹を見てかえり

公園のベンチ家出の娘もすわり

中共の服ぬぎすてる青畳

開店の花輪朝から雨になり

均一のタイ上になり下になり

師走々々みんなあわてるからあわて

かつぎ屋に荷物の番を頼まれる

懐炉まで入れて重役のみに行き

文化都市ランプも一つ買うておき

宝塚歩けば妻がふけて見え

スランプだスランプだとして飲み歩き

支払がちとふにおちぬバーを出す

誤字のまゝ読んで社長の祝辞すみ

嘘ついたまゝ十二月終りそう

正月の酒に手がつく年の暮

住込みの当座は手紙ばかりかき

田 中 烏 耕

若き日の恋人は今皺だらけ
半襟を買ってやつたる人も老け
姑の無病に嫁はちと困り
女形己が女房にもしと云い
さし向い座敷が一寸広過ぎる
人だかり傷痕軍人の哀調か
聴診器意気洋々と誤診する
人相見鼻の形も飯の種
鉄瓶の松風を聞く年令になり
涙ほど女を強くするは無し

田垣方大

生活に負けた帽子のかぶりよう
叱られぬ方へ子供は泣いてゆき
浮袋のかわり夫がする甘さ
停電に失礼な手を払ひのけ
十八貫社長の前でみじめなり
玉ネギのやうな頭の無作法さ
お電話のそばに誰かゝ居りますの
ライバルはもう来て居った火事見舞
聴衆は絶句の次を知っており
ローカル線牛のお産の話なり
妓から一人来てねを真に受ける

簡単に墮ろすだけさが憎らしい
校長がパチンコやった夢を見た
県人会検事が酒をつぎまわり
妾宅をうまくさばいて庶務課長
シュミーズになれば玄関のベルが鳴り
老技師の言分だけは聞いてやり
歛の柄にあごをのせとる春霞
妄想を払うミシンの急調子
一家みなマージャン狂にした後妻
酔漢に婦警はたゞの女なり
約手の話になり技師は食うばかり
あんさんは油くさいと酌ぎにきて
商魂は俺等如きを上座にし
ワイフにも出張報告せにやならず

研究が妻を不貞に追いこめり

非農家が目ざわりになる農繁期

鳶一羽悠々水禍見おろせり

縫目あるので素足でないらしい

値踏みされとる鉄骨のあわれなる

酔眼の奥を見つめるワイフの目

画家ですかなるほど鳶が壁を這い

職業を当てる仲居を敬遠し

しやべらない方がチップを置いてゆき

引退をして応接間かびくさし

すゝき原園児が通る声がする

巻すしを途中でやめた秋の空

つねられて妻を忘れることにする

パパマ、は見合でしたと押しつける

もう一度最敬礼をする賞与

支那そばへ夫のどてら羽織って出

不纏綴の方へ初めは親しくし

恋人の月給だけがまだ聞けず

次週上映ふとんを敷いたところまで

夜の灯へやくざ言葉の若社長

署長さんも諸肌ぬいだ冷奴

空腹で処女をなくしたとは悲し

徹夜した晴着花束わたすだけ

すき焼と決り女教師使われる

横座り今日も出前の皿ばかり

結婚に破れ続けて名女優

人の道説いて、女難避けられず

金貯めて冷たい夫婦とはなりぬ

高 沢 一 浪

焼場です否応なしに御出あれ
娘と同じ年と齡しの恋人娘にかくす

大晦日サルマタだけは替えましょう

急がない時は二世も日本語

お祖父さんの膝にずどんと三輪車

十二月女房如きに愚痴らるゝ

光陰は無情ちりめん皺がよる

又今朝も起きて濁流泳がんか

先輩と言われ老朽とも言われ

児に何の罪か肉塊などと呼び

ものやっけて相手のすきを見出さん

女から覚悟を先に聞かされた

肺をやむこと明かしてもよい時分

夕顔のたねとはつきり亡妻つ*の筆

要らぬ子と生れて父の名も知らず

サービスは男にこりていて上手

ぼろくそに言われ言われて石の門

けちんぼのところが女にすかれたり

悪友に手ぬるい恋を笑われた

博士号女房の力までかりて

がみくと言われがみく言うてやる

恋人と恋敵とをのんだ海

切れましようなどは腹にないことを

木石にあらぬ閣下の噂きく

恋すてゝ第二夫人としてたゝん

病む母があるからだます眉も引く

女房に向く話して三本目

年甲斐が白粉臭いのにも飽き

なす儘になつてもチップだけだった

案の定肉売らんかと仰せらる

もう笑いますと北支の父に書く

今君の悪口言うて居つたんだ

明月は悟れと言はぬばかりなり

眼をばちりばちり娘は恋をきゝ

金落ちてゐたのに犬は目もくれず

昔々惚られ初もありました

好な妓であれどあまりなせびりよう

考えて置くとも好な妓は言わす

胸をやむ人とは見えぬ大獅々吼

高崎雄声

樂をして喜ぶ中に我も居り

寝る事も仕事となつたストライキ

奥さんが病んでゐるらしかどのごみ

アジャパーが言えて親馬鹿嬉しがり

家貧しけれど孝子出でもせず

オイ車掌その車掌にもなれぬ身の

ノーハット帽子屋までもノーハット

いつからか女は露出症になり

真相を書くなと頼む名誉職

もう強く叱つてくれぬ父いとし

税などはどうあろうとも二号おき

食卓に座れば母の声になり

馴染には馴染の顔をする女将

毒味まで頼まれている馴染客

愛人に見放されたか髭がのび

宿の名も知らず団体ついで行き

馬一頭のせた豪華な貨車もあり

かつての元氣今は聖書の道を説き

重鎮の好み和服が好きと云う

ピカ一はサイン帖にも巾をとり

失業の哀れは詐欺に引っかゝり

多
胡
春
洋

川魚へ女房こわく箸を出し

師の悪い癖もいつしか心得る

前歴も生かして収賄仕た議員

お茶漬で済ませて旦那待つ二号

不作でとちよっぴり松茸送って来

膝折って娘の帯を結ぶ乳母

犯人の欠伸刑事は見のがさず

ざんげ録読んで検事も人の親

顎だけで合点している馴染客

武 部 香 林

ロソクがホゝホゝホゝと崩れたり
素足になって見給え春が来ているよ
先生の還曆僕は墨をすり

ペンと煙草とペンと煙草の忙しさ
そゝり立つ山の如くに父黙す

へのように云われ文科に入学す
知らぬには非ず内助へ頼かぶり

ペルシヤ猫青い文士だなどおもい

人の道踏んで場末に生き残り

蛙食いに似たる生活も差し向い

唯心論鶴の如くに瘠せており

二十五でもう税務吏は家を建て

裏口は醬油を借るによい所

ストともなればいっちすほらが先に立ち

ほれて見たい人だと仲居酌ぎこぼし

魂を圧して滝のドドドド

鬨わん橋の下にもお茶が沸き

酒があるばかりに会社また休み

重役になり人間になり損こね

愛妻へフンくくくと銭がなし

五十才に垂々として嫁にゆき

荷造のように湿布をしてもらい

妾宅と云えず一寸そちよつとそこ

おばあさんのとこえまじない聞きにやり

玉葱を切る時泣いただけと聞く

子煩惱風邪を引く子にしてしまい

暗がりを螢は夢の国にして

父は飲み家出の母は美しゝ

見送りの妓は地味なものを着て

じやじやむじやにしてから女寄りつかず

争議団二号の家もとりかこみ

足らぬとこだけ奥さんが口を入れ

湯上りの女に見とれけつまずき

日曜を休まぬ社長もてあまし

青春期空を歩いているような

へいへいと夜警の注意聞きながし

押売に負けてる妻の美しさ

ゴルフでございと大きな袋さげ

武 部 若 菜

慾も無き別荘番へ花が咲き

蕾がついたわよと朝のひととき

案内人元信描く声になり

学説をまたくつがえす法隆寺

初恋をはぐむ経済的理由

銭湯の大きい声はうちの人

お二人様と云われて固くなる二人

二人づゝ二人づゝ居る中之島

喧嘩した原因良人忘れてる

来客へ家庭争議のさりげなく

初出勤まぶしがられる日本髪

酔ざめに豆炭白くくすれたり
盲愛の手をぬけ風の中の子等
一人子を又連れてゆく中耳炎
血が通うように人形首をあげ
記者団へ側近うまく云い逃れ
片便りうらめば馘になつていた
押花のやっぱりあれは恋だった
二世までも嫌と女の笑い合い
ボロかすに云われ笑顔のまゝの妻
淀君の眺めた堀へ労働歌

むせ返る山の香りへ箸を割り
宿替えの一度見に来て呉れ給え
玄関に若さこぼれてハイヒール
うちの前にとりの櫛立ち並び

伊達堰子

僕の名で貯めてくれてた事知らず

例の後家又来てまっせ指定席

イヤリング家風に合わせぬ事になり

師の恩にビリで出たのが発起人

親として初めて貯金する気が出

秀才へ嫁がせ仕送りまだ続け

モミクチャにされてスターの嬉しそう

空腹へ見晴しなどと云うとれず

愚痴ばかり言うてて世話役やめもせず

出養生毒になるのを連れて発ち

雷が鳴って別居が恐くなり

トンボ取りあれから恐い池と知り
ふむくくと重鎮ねむたそうに聞き
背な一つどやしてボン引諦める
看護婦の恋に女医さんけちをつけ
手不足で呼んだ子守に病みつかれ
引き受けた就職酒の上だった
調べてる刑事に吃り移って来
後押しの手前があつて引込めず
口笛に彼女の母がどなりに出
屋台店飲める亭主で気にかゝり
師を見舞う破れ畳に胸せまり
法事たのむ寺も息子の代になり

田代尋四

締めたると見たら卵を生んでいた

腹の立つなぜ好きですとよう言わぬ

彼女ありと知らず貞女の手の太さ

恋すれば六十路なか／＼盛んなり

課長さん駄目よとキッス断られ

史跡巡ぐり

古井戸も覗いて見ねば気がすまず

供出の火鉢漸やく買戻し

酔いどれもジープが来るとしやんとなり

停年と聞いて喜ぶ部下も居り

築山快夢起

正直に談し借金ことわられ

買えくゝと迫るばかりにラジオ鳴り

そのあした特価いくらの服でくる

丹精の髭も落して闇屋する

さし上げて孫に鼻先蹴られたり

つくねんと金利の正体考える

金づまり先づロータリー脱会か

御先祖にすまぬ気もする帰化願

遠縁が焼香順に小さく居り

真夜中の燈光ちかり患者の家と知れ

辻
圭
水

飼殺しにするよな辞令出されたり
寄附金の使途が気になるほど集め
美人故醜聞すぐにひろがって
ブラカード面倒そうに持ち歩き
番茶一杯おし戴いた上司宅
育児本と違う病気に慌てたり
一円貨拾うてくれる人もなく
線路追う目が尖ってる運転士
草野球線路を越せばホームラン
娘から親馬鹿ですと云われたり
女事務にそろばん頼む大学出

初詣したばっかりにすりに会い
たよりないけれど隣へ留守頼み
バスガイド記念写真を又とられ
男だと云うた先約くづれかけ
恋忙し髪爪髭とのびて来る
事務的に御苦勞さんとねぎらわれ
暁の逮捕にもれた小さいボス
構えだけお城に似てる斜陽族
駄弁は売れても軽そうに歩かず
駄前がこんな淋しいところあり
真知子巻き北海道でもあるまいに
女事務酒癖までも心得て
競輪に傘までさげた周到さ
投身もしばし見つめた海の荒れ

津田麦太楼

油虫まで男世帯を小馬鹿にし

すい〜と蜻蛉のように女逃げ

一号はむつつり二号はしんみりし

媾曳の宿でネオンの裏を読む

初勤め社長の湯呑だけ覚え

こんな娘になるとは知らず後家を立て

同窓会から女房つん〜して戻り

一依転がして百姓の三つ揃い

刑事部屋狸の皮を敷いておる

置き去りの米にポリスの非力なり

女房へ土産の鮭の乾からびる

かつぎ屋のように田舎の母が来る

長閑さは汽車の煙を麦が吸い

社長のキヤメラに皆んな出て並び

糟糠の妻の遠者を持ってあまし

せめてもの紅の胴着に尼若し

清貧に居て町史など編纂し

叱られておって亭主に頼り切り

盃洗へマダム特級さつと空け

顎紐がだんく／＼天皇遠くする

ストリップパー衣桁のように掛けており

流し大工には台風様々

総入歯舌で浮かして嫌がらせ

穢らわしい物に触れたは母の恋

ほつれ毛も見せぬ女で冷たけれ

テイエンエージャーラブシンなどとこましやくれ

陣笠も漫画になって見たい夢

死ぬくと赤ネクタイを引っぱられ

内職をそちらへ押して坐らされ

婦人科で亭主に持たす名古屋帯

真剣に口説けばガムをぼくと吐き

あれほどに嫌な養子でまた孕み

白魚を値切って顔を見あげられ

子沢山歯ブラシの柄の色とりく

高校を亡ってからの藤間流

一号は賢婦二号はちっと抜け

売れ残るものに人間とは哀れ

衣桁から亡った帯は生きており

受付へ鎌を預けて投票す

寺
井
銳
々

小切手など女給に見せて飲んでいる
金を貸す方の背広が擦り切れて
折靴のふくらみほどの用もせず
金策へ靴を磨かぬ日がつゞく
貧相の見本のやうに易者佇ち
口で字を書く生活寒く見て帰り
硝子ふと触れて冷き病後也
通勤の足がバラスを踏み馴らし
空嚙を酔うてる方が忘れない
信念が古洋服を恥とせず
靴下にツギあり模範バスガール

戸田古方

一冊二十円のところにあつた戦争史

流産の話は猫のことでした

落第の醍醐味なんか知るまいが

よらば斬るぞ時々ゆうてみとうなり

温泉の賀状が来てたこともあり

追いかけて来てまで女の子のわかれ

味のないうどんだまって喰べる父

ベビーウイスキーなんか御存知ない身分

人間くさいところにポン引ボスおかま

アベニユーらしく灯のつく御堂筋

校長の居間茶道具の一揃い

彼氏というて娘たち話する

気が合うてだまってまけた古本屋

京女みるたのしみも京の旅

ばた／＼としているうちにお経すみ

二号の子なればこそ先生にしたく

ワンタン屋と並んで歩いている夜霧

告別式義理が一丁程つゞき

ペートーヴエンすむまでまてす逃げてくる

刑務所も天国である女囚の兇

不器用な父に手工を手伝わせ

一寸だけ喋るに役人供をつれ

踊り喰いふと地獄絵を思い出す

神経を抜けば地獄の面白さ

美しい喪服と出逢う鳥辺山

アスファルト風は無残に引きづられ
借金をしていると見えぬ花の村
オーエンの嘆きをよそに凡夫ども
和寇史は波がきかせてくれました
小腸の様な結髪史の挿絵
碁の本を開けて駐在所お留守
公平な話後家さん承知せず
白痴美はライカの方をふりむかず
世話好きの師走ドブ板ふみはずし
親戚は足音のする焼香し
あやまりに来るに女生徒連がいり

戸 倉 普 天

いつの間にか書記長眼鏡使いだし
気の置けぬ客なら火燵へ通しとけ
肩書に免じ麻雀勝たしとき
札束をさもぞんざいに闇屋出し
選挙違反事務長だけが引っ張られ
我世では喰えそうもない柿を植え
急いで居るのにまだ支店長判押さず
蓑笠で画中の人となるもよし
拾歳の児もあり赤いジャケツ着て

村長退陣

郷党に余生捧ぐる愚を悟り

美しい人乗って来て京近し

コンクリートの隙にも草は生えんとす

社長室只ウンウンのいそがしさ

採算はどうあろうとも麦を踏む

半パンツ常務は鶴の様な足

紅しようがだけの配給どすかいな

参政権女は諸の方がよし

闇肥料やっぱり利いて麦青し

親しめば土にはちっともうそがなし

精農のさも軽るそうに歛かつぐ

本日休診奥では寿喜の香がし

別邸が倶楽部となってダンスとか

丸停のしきみに御先祖おかしかる

あの頃の百円だよと念を押し

係りは居らんと新聞読みながら

退け時の君も塙に急ぐのか

看板と菜種大阪駅近し

会議室女社長は座り度し

花便り雪便り日本狭くなし

低い鼻工場一の働き手

靴下の片足づるも可愛らし

どこに行く船か濛々西さして

通訳が笑えば俺も笑つとき

学界の権威猫脊で親しまれ

友 淵 貴 山

女劍劇恥しいわと云う胡座

相惚れは釣銭渡すのも忘れ

雪とけを小川の水の量に見る

礼厚うして催促は断わられ

スナツプの受取先にちとあわて

梅雨空に塚・長崎市史と寝る

事故現場白墨持って走ったり

試験場外は花咲き鳥歌い

招待券妻は勝手に行ってしまい

しりからげしたは芸者のダンスなり

御座敷のダンスは抱いたまゝでよし

書籍部と化粧品部に寄る若さ

家族連れ喜劇の方にしてしまい

恐ろしさマツチ磨る趣味男の子

酔うて手を出せば女難の相と言う

大物は押しの一手を出すばかり

先代にすまぬ商魂パチンコ屋

常連はマダムの見える席をとり

いける口話せる口でなかりけり

おばあちゃんあるので平家建にする

遠慮しておればエレヴェターまで閉り

飲み過ぎが固い握手を続けてい

虫の喰った毛皮へ坐り斜陽族

屋上でつらく思う事多し

テレビジョンあんな顔から声を出し

財産税どうのこうのと奥座敷

一桁が違つてゐるよな税がくる

中の島メーデーに行つただけの事

虹街を包み夕刊売れ残り

葉巻喫うそんな儲けはしておらず

掃く事に慣れて老後の朝の庭

養老院まだ内職が続くなり

ガード下女は素手で生きんとす

子等が読む貨車の長さへちつと待ち

真相の真相といううそも吐き

代表としての祝辞を読み違え

それがしの悴貴殿の息女好き

一生に光つた靴もようはかず

富岡淡舟

一攫千金の誰か夢なき宝くじ
どないしたんやろ朝鮮語の喧嘩
子沢山父につく子と母の子と
卒業は近く煮焚をさせられる
死ぬ心算などと恋愛技巧なり
夏の夜や市会議員の酔虎伝
満ち足りた顔かな孫と戯れる
逆わず待とう時勢は流るるよ
勉強の子に邪魔なもの観世流
大阪へ帰って橋をなつかしみ
据膳喰った果ての双傷

酒有り妓あり脱税して居たり
勤続二十年で肩書のない名刺
兄の顔芸術性がなくまるし
百円の借り貸しをする裏長屋
寝化粧をして未亡人切ながら
当然の如く三男無心言う
人情の冷たき家の白い壁
すっぱりと別れて若いのを貰い
金で済む事ならという顔がいや
人生は風の中なる水の如く
乳房を吸う顔恍惚として見る
靴磨きおやく／＼ピース吸うている
莫銭位はくれる娘となりぬ
学問で負け経験で云い返し

一時間五分待たした怒りよう

錢無しは渡りに舟とついてくる

ほれられて居るのは僕かてれくさし

進歩的意見もあわれ独りぼち

金の要る話気の無い返事する

監獄の方が待遇よい世相

謹厳な父に妾があつたとき

物申す声は学生アルバイト

身投げをば哀れと月もゆがんでた

お茶漬が恋しうなつて暇乞

サボテンの如き女で手が出せず

何の日かラジオはお経あげている

死んでない証拠に河馬の耳動き

物売りに涙もろさを附け込まれ

長生きをせよと相手にして呉れず

社用族ならん影絵の高調子

お父さんの様になるとはいぢらしい

取締る方もつらいと老巡査

修理工齡も判らぬほど汚れ

あきまへんやろかと借金気が弱し

へつらわぬ気性を皆に見込まれる

悲しみに堪えなんとする酒なるか

完納の税金議員に呑まれたり

P T A の役員でんね朝寝すき

病室の蠅一匹に気をつかい

鶏を裂くよに外科医無表情

父親は只居るだけの看護なり

盲従をしたのに賢妻とは哀れ

土井文蝶

口振りは今にも落ちる仲居さん

待ち呆け女心を見せられた

パチンコの負が削った副食費

その当座丈のつもりで身を任せ

我も亦凡愚の一人酒の酔

万事OK二つ返事が支払わす

いつ死んでも悔なき程に邪魔がられ

ストかいなあたら紋日がふいになり

半年も経てば忘れる程の恋

一周忌遠慮さしたい女が来

働いて取れと資本金折れ合わす

籍は大坂花の吉野の仲居さん

紙屑屋物の値上りくどく聞き

焼鳥になるとは知らず今朝も鳴き

借金取りが来るので野球観ています

自殺する人とは知らずガスは出る

子は小さししが無い職に甘んじる

過去帳に酒一すじに生きた父

判らず屋ですが良い腕持っています

デモつたと知らずほころび母は縫い

二号さん向う任せで買う金魚

へボの熱こんな大きな菊が咲き

本当に惚れても嘘にしても

市場籠持つひとときを女医愛し

茶瓶から夜警おしきせだけは飲み

内藤草一郎

歸化しても唄は二上り三下り

もの足りぬ夫事業の虫のよう

同窓会女優がいつち羨まれ

ヒスられた頃がおいらの花だった

見つめられモンキー蚤を取るを止め

忘られるものは継子の誕生日

怒る時だけに父親使われる

まだ早い／＼とをんな泊める気か

子が五人腐れ縁とは云わせない

倦怠期添い寝の肩の寒いこと

嫉くよりも寝化粧なりとして御覧

病院に居るに後添もうきまり

見込まれた腕も養家を支え兼ね

若い気で居ても求人欄のそと

思うつぽ御世話になると折れて来る

捨てられて先の男のよさを知り

迷うまい男振りより金にしよ

私では気に入るまいがと酌ぎたがり

ライバルと花屋で会った間の悪るさ

気がつかれますわと若い亭主もち

そもくの笑顔いつまでたゝるやら

中島生々庵

七光り長屋で役に立たぬ也

死にますともヒス第一巻の終り也

香煙ゆれてあゝ人生は終るのさ

交叉点母ちゃん一人赤になり

パイプなしに喫う麗人の細い指

聴診器私の胸もきいてほし

出来るなら坐りともない麻の服

強情ぢやないよ棘の俺の過去

断じて行えばそれ島の内にかがたち

税務署の通達決闘状に見え

貸し借りもなく湯豆腐の大晦日

母と往く心斎橋の片日照り

うるさがたあんなが長が生きするんやで

子猫ぞろ／＼みな宿命の顔かたち

あみだ籤の頃の舞妓も俺も老け

女房はさからう様に薄着なり

貸す傘もなく夕食もせまって来

千円もしますのやでと酌をされ

山寺の涼しさもよしきうりもみ

深々と母七十年の顔の皺

精魂もつき未亡人髪が伸び

俺も戦後派拜む心に遠ざかり

待って居たくせにしぶ／＼かくし芸

ストの朝古武士の如く馳せ参じ

寂しからずや七十にして節を枉げ

痢の立つ立ち退かせたへ二号入れ

保険つけたスターの足と知らぬ蚤

医者として言えば姑達者すぎ

小走りに道頓堀を医者稼業

聴診器昔昔の傷にふれ

親おろろおろろ受験の日がせまり

パトロンへ引くべき線はしかと引き

会費丈けのんだつもりが酔いつぶれ

小なりと雖も新築木の香り

くたぶれた白靴に似て老妓ふけ

うらやましくないか俺には母があり

長野井蛙

長と名は付けど一人で掃除もし

正直な方と小馬鹿にした口調

理想論だよと資本家取り合わず

去る椅子へも一度しみく掛け直し

イヤリング夜汽車に見栄もなく眠り

不平組上座へ尻を向けて呑み

無口にもあんな不平の言える酒

退職を目出度いなどゝ気も知らず

あざけったその職安の窓に立ち

献盃の膝を正して順を待ち

末席の不平へ社長酌ぎに立ち

花泥にまみれて昨日の姿なく

散ることも知らず造花の色が褪せ

転んだがアイス靴は手放さず

蔵の窓こゝにも生き抜く灯が点り

廻り椅子不平は脊で軽くきゝ

傲然と土蔵はなをも暮れ残り

あばら家もあまさず入れて虹の橋

洋食も蠅は一向ためらはず

同権がまだ容れられぬ風呂の順

税務署の臆面もなく床柱

脛嚙る口で権利の自由のと

撒水車白足袋とても容赦せず

軒貸してその売上げに気が動き

顔捨てゝ穿く地下足袋に道があり

この雪へ生きねばならぬ足袋をはき
ニコヨンの怒声を鉄扉はね返し

同情はするがと巡査聞き入れず

ポリまでがボスの味方と知るお茶屋

双眼鏡の中とも知らぬふざけよう

牛を飼う隣りへきかす蠅叩き

代筆と知らずサインを見せ歩き

パチンコのこゝにも人的資源あり余り

闇米のルートも確と引継がれ

稼がねば喰えぬ一家へ今朝の雪

これからがお隣りと云う筈の目

姑は炬燵にいても鼻が利き

白粉の宣伝になる顔を貸し

若鮎などゝはやされたのも二昔

那谷光郎

辞める気が卓に両足のせて喫み

二次会の割勘以来仲違い

聴診器家を診るなと思えども

問うだけを答える医者頼りなく

婦人会言葉の綾で嘘も云い

物騒だ巡査に二階貸したるか

貧乏の印肉までが干乾びる

たくまなない仕草で女医は児をあやし

風邪とのみ信じて居たに訃報来る

診断がまだつかないに治って来

私生児にふれず産婆の世辞のよき

誘導尋問妻のうまさに引っかかり

新調のカメラへ母を坐らせる

さもしさは全集を金に見積る日

魚屋が来たのを猫が先に知り

辻八卦近頃汚職の顔も貼り

どんづまり家宝が税になって消え

取り持ってやってマダムは少し妬き

授賞式代理つまらぬ顔でいる

鋸も使えて新妻見直され

猫の脊撫でて二号の拗ねる癖

踏み台にのれば打つ釘落したり

待つ間標語覚えた控室

テニオハを抜いて帰朝のよく喋り

ギター弾くなどと知らずに部屋を貸し

永藤 彌平

ガード下焚火へ浮世捨てた顔

生理日はペンもじやけんに出出され

入水のこゝからさきはエキストラ

となりの子わざ／＼抱いて市場籠

デパートの主任はもみ手する役目

斗病の窓へ青々蔦がのび

交際は致しませんと高い堀

湯上りのしぼんだ乳は出したまゝ

はったりの会社で部長以下が無し

永松東岸子

草野球相手の選手一人借り

ボスの子の名は先生もすぐ覚え

親類と他人に通夜の席別れ

ここだけでないと給料遅配され

愚痴きいてももう隣りの戸をくぐり

おもむろに校長固い洒落をいい

同窓会開けと淋しがり屋から

寝室と一目で知れる窓明り

一生のねがい村会議員とは

半鐘がジャンと鳴るのも春のこと

強制ぢやないないのでしようと婦人会

二階借りでも都会なら行くという

ドライヤー男阿呆のように待ち

弱点を握り敬語が少し取れ

助かった様に電話に座を外し

掛軸の裾にも春の風ありぬ

大掃除たたみを出しただけですみ

いい智恵はないかと孫子借りて読む

昼飯の話題ストでもやったるか

お小遣い芸者が呉れた日もありき

文化人裸にすれば細い骨

愛の巢の朝のほうきは僕が持ち

神様はまだまだ苦勞さすつもり

並木道こゝから助手の手と変り

面白くない日は重い茶碗なり

予算審議うなぎを押えつける様

独酌を養子一向氣にしてす

集金の顔が交ってまた延し

秀才を娘それ程買うていす

私も秀才でしたと漫才師

鯛の刺身出て宿賃が氣にかかり

赤帽が帰る帽子をかぶり替え

失敗の当座は妻へ素直なり

湯豆腐の湯氣の向うに妻の顔

答弁の間違い秘書にささやかれ

百姓もいいねと街からたまに来て

永田六龍子

何思う中年からの舞扇

目薬も持って夜勤の門くぐる

恩賜の手今日は淋しくギター弾く

借りる丈け借って蕩児は祇園の灯

公務員だけでは喰えず灯を下げる

痩せばっちこれでも筋金通ってま

モーニング不思議な御縁へ借りられる

ゴホンと咳したら踏込めと捜査陣

花見とは云わす墓参の賜暇願

恋語る上で螢は明滅し

ここも又きのよいよいの盆踊り

ニールックへあれパンパンかと子に問われ

土曜日から来いと友情あふれてる

サンドイッチマン足で稼いだコップ酒

大ジョッキ緑風に顔撫でさせる

憧れて来た大阪で眉を描く

人間は結局孤独みんな嫁き

素足に浴衣宗右工門町の午後

団体で来たと顔丈け出しに来る

こちらさんが先客ですと叩き売り

行ってすぐ帰るに派手な羽田港

総身に入墨もんく若き日の行状記

役得もようせず役所の生字引

脳溢血二号の事がばれて揉め

月を見る只それだけに粉をはたき

中
松
恒
雄

ライオンの死は算盤で悼まれる
恋と言うものさと肩を叩かれる
お見舞へ足の細さを出して見せ
録音は家族のすゝりなきも入れ
焼跡の柱草月流に立ち
給仕から上り今では判が押せ
海の青人を呑みたい海の青
遭難の山も綺麗な秋景色
一人旅淋し温泉すきとおり
年寄がいて洗濯機まだ買えず
座り込みしたボーナスで歳暮する

山中節に浮かれ河鹿を聞き損ね

風邪ひいただけで首相は記事になり

我が子もう父の頭を古しと見

兄さんと思うてますと振られたり

歌麿の絵になる姿態足袋を履き

羽二重の夜具で睡眠薬が要り

告白をすることあるの酔わせてね

配達がチップ欲しそな汗を拭き

写真屋が居るのに列を出て指図

金儲けにならぬ古蹟は草が生え

死んだなら後妻を貰うでしようと嫉き

西尾 栗

ヨーヨーのように蝙蝠飛んでいる
マダムふと壁の銀狐の瞳と遭いぬ

皿割った音を奥さん寝間で聞き

大臣に会うたというは廊下なり

クリーニング屋バラの垣根で呼ばれたり

牛肉屋のおっさん理事の名刺くれ

首巻をとる真似だけの家主なり

二次会で土産の鹿の角がとれ

船頭の小便に渡舟待たされる

ハンドバック迷える心パチつかせ

エキストラー次に出るまで寒いなり

翌る朝子供出前を見逃さず
一舟の西瓜がぬくう残される
一人子へ電灯が高いの低いのと
京や京バスの中なる僧と僧
伊達巻の後姿へ湖うみが暮れ
市電代返すにもめる女連れ
男ハンの悪口舞妓もついで言い
カレライイス許りで今日の画家となり
そんな絵かきとは宿屋露知らず
一筆の富士は漢詩でうめ合せ
矢倉鮎だっせと遠い耳へきかし
横町のその横町の握りすし
洗濯の雫へコスモス真盛り
干竿の落っこちた鶏のあわてよう

まい／＼に暫し忘我の我でよし

朝の床ピンはパラ／＼落ちるもの

干し柿のあたりに夕陽まだ残り

のみこみを信じ代議士邸を辞す

股火して待たされてゐる幹事さん

かなしきは舅十手を預る身

桑の葉をたゞいてバスの行き違い

退院へ爪先ゆるい足袋を穿き

感謝したりうるさがったり子沢山

家族主義という怖い二階借る

ようきいときやと妹ついでに叱られる

ハイヒール待たしてあります歩きよう

空巢ふりむけば国旗はためいて

鯉節水晶の型にかゝれたり

ヨ、と泣いといて他人さんへ嫁ぎ
四人目を抱いて器用にめしをつぎ
ベレー帽どうですという冠りよう
人が悪いわ養子さんでっかいな
ネクタイをしめく、喧嘩のつゞきする
おまえ使うていたんかという鉄
恋人は刺客のようによりそうて
殺生やおまへんと質屋裏返し
傾髻をしごいた程の文字でなし
御宸筆瓢箪型に紙魚は食べ
初入選西陽きすこう位置に在り
万引の哀れ子供のもの許り
義理がたい人に元日起される
応接間の金魚逆立ちしてみせる

西
い
わ
を

春の宵謡本など出してみる
御苦労と云える立場で暮したい
先生はお気の毒よと身を委し
気のついた時は老年組に居り
取込みの中も女は飯のこと
閑職に居れば気易うものを言い
抱かれてからの女は弱かった
優遇もされず辛抱する強さ
愛称の電話東京からかゝり
養子又次の養子を考える
コスモスを咲かせて市営住宅地

悪口を酒の肴に飲み続け

別れても主人くゝと口へ出る

もてたこと妻へ話して笑われた

神経の太い妻なり戸も締めず

口説かれてみだし座敷にある炬燵

広すぎて二階は締めたまゝの家

奥さんを持たず生徒を可愛がり

ストーブがは入り席順変らされ

名人の名刺も出さず帰るなり

貧しければ子を限りなく愛し

銀閣寺上海からの客もあり

一寸した事を花嫁間違ひ

西村梨里

ぶどう籠持てば貧しさ絵の如し
風吹いて淋しいことを思い出し

骨袋白過ぎてまた涙する

奥様にされて市場を出て笑い

泣いて出た劇場前がまぶしすぎ

十二月こちらが欲しい寄附を出し

結局は物質などに馬鹿にされ

先ず集まればやせたい娘ばかりなり

ひとりいてネズミ如きにおどかされ

肺だとか聞けば佗たびしい立姿

ヒスと云う戦術もあり女は強し

おどかしてやりたく自殺してみたく
大金を捨て、みたいなビラのように
こそばゆいお世辞へおじぎするばかり
自己紹介をするにオールドミスですの
親に似た短気で職を辞して来る
御近所の子にアババをして通り
喰べて寝て猫の現実主義もよし
愛と言う言葉をならべ詩人逝く
足組んだとこだけ女優さんに似て
未亡人仲居に出たいのをもらし
特権のように青年議論して
ライバルへほゝえむそれも教養か
ガラス製品のような一人っ子を抱き
タンス水屋ガタ／＼鳴らしてスロークイック

リズミカルに歩きたしこの街の灯に

存在を無視されたまゝ会は果て

腐るからこれも喰べとく肥りよう

泣けば済む涙と見えし我が涙

女なる悲しみおんな酌をする

わたしも女妓の握手淋しく見

或日蝶々になりたい空の色

新米の車掌と知れる親切さ

病人を見舞えば裏の畑に立ち

月なんぞ出よが曇ろがアプレ型

恋愛論引き分けのまゝ午前二時

蠅とまっただと言えずお菓子を頂いた

泥臭い河で恋の灯ボートの灯

お花見に来て暮しのことを言い

石橋を叩いて恋に見放され

アブレだと見たかビールにさそてくれ

づけくと言える無邪気を羨やまれ

別れたげると言える自信は妻が持ち

死にますと書いた手紙の無駄になり

昨日は死ぬ気今日はビロード買ったがり

息しても聞えるような村に住み

ちと足らぬくせにお世辞のうまいこと

光るものつけそれが女の総てとは

立板に水の女にたゞ見とれ

たい子から女の価値がまた下り

西 出 一 栄

混浴へタオル一本たよりにし

その恋をあきらめさすも友として
かくし芸知られトップに指名され

バサリ新聞カタコト牛乳朝の音

食欲が出て来て垢を気にし出し

手土産と思えば先夜貸した下駄

下戸同志申し合せて席をとり

宣伝はお鍋の一部だけみがき

針に糸通らぬ年で妬いて居り

割烹着外せば母あちゃん外出か

池の鯉明日のいのちを知らぬらし

西 辻 竹 青

脱税の儲けるよりも骨を折り
自重論妻は遊んで居れと言う
女房にすまぬお客の日々続き
御家風を継いでやっばり蛙切り

銀婚記念

銀婚の妻抱き上げてもやれず
この社長落第生であったとは
多弁もう家の秘密を打ち明し
吉報は電話口でもお辞儀をし
後妻でもよいわとシンミリ三十二
すねた夜の別れくくに食う刺身

十年一日されど小さき椅子のまゝ

新課長机の位置を変えただけ

倦怠期どころかうちは火の車

老妻を歌舞伎文楽松竹座

せめて夕食位は共に食べたいわ

米米米あゝ食う事の忘れざる

ハイヒール時計はメッキとも言わず

何とでもしてゆきますと女すね

恢復期妻は散歩の下駄揃え

その方に逢わして呉れと妻静か

東京も見せてやりたい妻の年

おっさんと言われて守衛それでよし

父未だ明治の頑固捨て切れず

西 森 花 村

御免ねといつて仲よし先に嫁き

つかまえた家出に連れが出来ていた

彰徳碑読めず大きな石やなあ

蠅に似てやがて飛去る男なり

天井から四角に折れた僕の影

怪談は不入の方が凄く見え

夜の地震起きてこの子を忘れてた

怪人物いつか名士の数に入り

やっとミシン買えば洋裁熱が醒め

ぜんまいが切れたか女泣きやまず

何もせずじっとしてたらよいレール

舗道には舗道の音で義足行き

缺勤をしてでも行く気エキストラ

燈明に似て一筋に燃えし君

その次も同じ薬で外科はすみ

心中の親うちの娘がだまされた

十二月遺憾ながらと返事が来

にらまれて見れば白靴踏んでいた

我慢して外科医のでぼちんにらんでる

万年床車庫入りの様すべり込み

連れ出しておいて歩くと無理なママ

すぼっこな嫁に年寄冷や／＼し

税務署の隣りへ新築してこまし

寒行のくしゃみ残して辻曲る

ひっそりと猫だけ寝てる春の部屋

色どりは料理の本の通り出来

エレベーター押し込められてお辞儀され

幼稚園めだかのように散ってゆき

うちももうちき三十のヅカガール

アルバイトやっぱり月謝滞納し

そうめんに似た雨降らす夏芝居

轢死体コスモス未だゆれやます

鳴り止んだ目覚し今日の義務は済み

あの顔が俺かと床屋で目をつむり

泣きもって又わるさする男の子

僕の家花道程の露路の奥

擬国会本物よりも筋も立ち

まま事の筵の端におばあさん

大阪の広さ失業してわかり

内職の場所を変えてる雨の漏り

悴からお古をもらう年になり

受けとらな通すものかとピラ配り

八月も同じ値で売る風邪薬

腹いせに妻おじいちゃんく

ソロバンに合う義理ならば果しとき

間違いなやと宿題母にさし

胃が悪くないかとラジオに尋ねられ

儲けても散じる性と易者云い

退院と聞いたかあわてて見舞に来

天と地の間をひよこ駆け廻り

春の水身投げの様に椿浮き

秋の風大仏さんの膝が冷え

尋常に討たれてしまう秋の蠅

間違ってましたと冬が引き返し
巻物の様に秋刀魚を猫くわえ
逃げもってパパ暴力はイケマシエン
その割に葬儀屋自宅から出さず
未だ蚊帳を吊ってまんねん文化の日
小遣いをやれば雨でも悴いす
三年目お琴は邪魔なものにされ
絹漉しの感触秋はもう近し
消防のサイレン星の降るような
新刊も読んでますわと女給さん
お経にはさすがローマ字書いてなし

新岡回天子

島に居て嬉しいものに船が来る

世話をさす時はさせてと不平がり

老いたりと謂ど女と酒は別

御ちそうが火ばちで出来る新世帯

店火ばち抱いていねむる冬の町

汐干がりいでたち程は獲れていず

商用で通るに惜しい土手の花

つり竿が見えかくれするあしの土手

貧しさを忘れる支那の小鳥籠

一筆を頼むスズリを持って来る

元氣良い拍手が欲しいP T A

たまつてゐるらしく女將の無愛想
予算書も読めず議員の席につき
恋愛でもせねば陣笠名が売れず
善悪は言わせず真ねてる夏時間
トンカツになる運命を良く太り
どろ水へカキ舟紅い燈をともし
龍顔の近き老の眼しばたたき
助かった話信じて手術台

よそみしいしい無事に芸するサル芝居
勳八の結局メタルにもならず

断りの口上半分妻の智慧

停年が近いやみも軽く受け
ぼん人となつてパチンコ面白し
雲一つなくて対馬の見えるツリ

野村味平

元將軍一軍を叱咤するごとく

丹前のまんま元日撮される

ガミ／＼と言うて気のすむ男親

中共から連れたワイフは下駄が好き

ベースには遠くネオンの灯をそれる

どちらを買って戻る共稼ぎ

晩酌の膳へ尖った暮の声

おあつらいが来てマネキンは脱がされる

小屋掛けがすめばキリンはやって来る

土産にはちよっぴり足らぬ鮎を釣り

肩休めのつもりのストが長くなり

なまめかし移り香に似て桜餅
迷い子へ交番おどけた笛も吹き
別れましたと化粧濃目なり
真似丈けは人に敗けない腕を持ち
代理になるのに衣裳も貸して呉れ
御用聞き将棋の詰手知って居り
ワンピースだんだん夏の色になり
これきりの転業を又する気なり
淀川の広さになつてドグロ釣れ
老眼は襦袢の先でぬぐわれる
勘定がすめば扇子は忘れられ

野村初甫

丹前の紅一点は呑まされる

女子大を受けるくくと二年越し

リベートへ下積までがあやしまれ

美容師も和服を着てる三ケ日

抱き上げて賽銭箱の底を見せ

こけし皆目鼻の位置がチト変り

再会の市場どっちも葱をさげ

二児連れて赤いマフラーがまだ似合い

井戸水の雫で育つほたる草

子が無うて養老院も見学みまきたし

母はもう財布を探す年になり

払い戻しうちの人には行かせぬ気
夜が明けて陳情蒼い顔で去に

かに半匹へやっぱり一本つけましよう

三面鏡買いもせぬのにあけて見て

どうしても歌手になります声を持ち

売店を貰うて後家でおしとおし

相談に来て相談をされて去に

宣伝部の名案みんな金がいり

洋花の名をきゝナースメモをする

アベックへどっちも財布出し競い

足が出るくくと出張ゆきたがり

気管支鏡へアシカの様な声を出し

本妻も二号も同じ型のヒス

家庭菜園枯れているよと子が教え

接吻のテストもしてゐる楽屋裏

表門今日は開いてゐる弓の会

浮気などしないつもりのんまの祝詞のんまきく

屋根直したいと云うて死に

おしてきやはんのやわおしなさいと祭見る

問題にならぬと本妻なだめられ

炭つかむのに古い手袋よう捨す

嫂へ無心に来れば他人めき

ワイシヤツの汚れ病妻氣にしてゐる

療養へ欲しいと思ふ羽根布団

上役のおごり結局うどんなり

一目惚れわたしのものと決めて来る

方角は二号の方がよいらしい

ランドセル辻まで送る癖がつき

野 本 吞 水

沈没船マストの間へ陽が沈む

処女らしく世の醜さに抗議する

田が消えた学資と知らず呑み歩き

姐は白く乾いて妻の留守

旅疲れわが家の畳古くとも

唯吾に生を与えただけの人

交際えばペーパーナイフに似たる人

正直がすぎて辞表を書かされる

滞納はしてもすっぱり青畳

象の眼に遊惰の民とうつるらん

同権を考えもせず世帯じみ

金権に嫁して若き寡婦たらん
掬られたはむつかる子供のせいにして
定見をすて左遷にもこだわらず
生きのびた古稀へ女の孫ばかり

長男死亡

おんぼうの素振り焚火をする如し
腕白のお詫びガラスの寸をとり
銭湯へ首巻が要る父の齡
七年も前の地図にて便って来
御用心下さいそんな犬を飼ひ
病欠の届一度は疑われ

浜田久米雄

駅長を一人残した春の汽車

二等から三等を見る顔になり

いかに申候とても小役人

茶話の父には父の湯呑が出

ゆうれいが出そうに柳風がなし

肩車してほしい子の眼を感じ

旅はよし女按摩の来る気配

春惜しむこころ菜種の花もよし

蚊を追うてやれば動かぬ試験の子

退屈の午後へ牡丹がくすれたり

さんまだ鱈だやっぱりやせる者はやせ

道草はわらびを二三本見つけ
麦の青寒さを越して来た青さ
制服にわが行く道のはるかなる
人形はさびしわたしもさびしい娘
老いらくの恋ハンカチにしわがあり
勤続のある日は虫にさも似たり
人間の嘘は拍手鳴らしとき
旅行地 冬には冬の旅があり
飲むだけの義理はあとからついて行き
水ばなをすゝり仕事着また動き
ほうき持つ手付きもすでに女の子
親不孝して来た金歯とは見えす
商魂のこころにくさを買われたり
風強し消防団長灯を消さず

借金を払う大きな声になり

ここも秋古道具屋の店がひま

妻と子とぼくとなつとくする月賦

消防のはっぴを着れば気がかわり

百円のことで年寄りむきになり

この人もうまを合わしに来た眼付き

吸がらは破談の横で煙るなり

吸がらを見つめえらいこととしてしもた

蚊柱の下ですげない別れする

ステッキが先に降りてく一等車

いたわってやれば牛の眼動かない

粟おこし配って旅の疲れが出

女手のとに角種をまいておき

おでん屋の払いは俺が俺が出し

早川清生

春だソレツ記者は動物園へとび

たかがプロ野球に初号活字なり

長子には不況を知らしておくと決め

セーヌよりわがせせらぎの美を語れ

悲しみを蛙ケロケロとしか鳴けず

頂上で五分ほど耐え征服記

菊の香にいて老作家もう書かず

ボーナスの話わが社のことでなし

いっそ子を野球選手に育てんか

愛人のあらが目につくのも年か

アルバムのそこは嫁く娘が剝いだ跡

汚職聞く千円さえも借れぬ身に
青く青く春待つボート塗られて居
鯉に麩をやるごとく処女捧げたり
血を売るにまで着順の列があり
死亡一看護日誌のきれいな字
ちんどん屋うちの子一番前にいる
表情があつたと見えぬ頭骸骨
俺ひとり下車一斉にドアが開き
多子家庭育ち食事の早い妻
税務署のサービス晦日まで出ます
ねんねこで課長が餅を焼いてたぜ
さよかさよかと社長儲けとり
勤め人ここから先は任されず
玄関を犬の親子に陣どられ

ビルに区切られた青空しか知らず
死ぬときのことという愛し愛されて
極道を直しに貰われたとは知らず
誘惑をそらす気膝の蚊をたたき
人の世に疲れブランク高く蹴る

幸四郎登場割箸の手がとまり

影長く引いて浮浪者冬をゆき

相談欄犬になめられたと思え

借金に行く人もいる日航機

たこ焼の灯から大阪昏れかかる

半生はゴムで消したいことばかり

質屋を出れば今日は満月

労災補償身体髪膚金になり

ざあますの箱根以東はまだ知らず

京極で京の娘がみんな下車

女工織るわが身に纏うものでなく

小便をしてメーデーは解散し

退職金の端数が飲め飲め飲め飲めという

飛んでも飛んでも鴉夕日に追っつけず

観光地ホテルは脊伸びして並び

棺桶が労働基準法で焼け

恋愛資金が結婚資金貯めさせず

ピイチクパアチク敬老会の貸切車

横綱は負けてる写真ばかり載り

集金人店主ほどにはお辞儀せず

バスに乗るとこまで新婚撮ってくる

年賀状ねまきで書いたとは知らず

夫婦だろ女がうどん代払う

橋 本 緑 雨

池の水枯葉ばかりの底を見せ

女からコースをきめた手紙が来

法要にすわりなおして灯を眺め

葉の落ちた音も火鉢で聞いている

受付で軽く見られた男也

別荘の話マスクの中で言い

空撃のニュースに兄は見当らず

上かん屋顔をも見ずに酒を酌ぎ

出前持呪いたくなることばかり

こんなもの買わされますと婦人会

一升の米を借りたり貸したりし

食料のたりぬ都へやれぬ嫁

草の名も知らず喰うこと教えられ

白菜が四分の一の今日の列

転業と移転位牌に済まぬなり

古くからの行事もすたれ寝正月

夢にでも話に来ぬか三回忌

面影がさらず敷居にけつまづき

停年の寂しさ物価あがるのみ

ミスポリス視線をさけるとここに立ち

雨の宿山を眺めるばかり也

郷愁のないのに寄附を言うて来る

悪人になれず金庫の番をする

水道の音で書留またさされる

初詣り賽銭を踏み足を踏み

服部十九平

高過ぎる勘定書で鼻をかみ

親切な女医が病気を長びかせ

春雨もH20に変わりなく

テールブルヘ足なげあげて記者倶楽部

一年生のように電光ニュース読み

杉林一本一本天を衝き

墓地移転跡に観光ホテル建ち

肺を病む娼婦がバイブルなどを読み

夕焼が一層綺麗な水害地

ゼスチャーで出した辞表が受理せられ

大学というバーもあり文京区

橋の下に住む人間が犬を飼ひ

先生のヒスにチヨークがまた折れる

見せ物が明治の色で来る祭

売り物とチヨークで書いた古屋台

貧富の差こゝにもあつた鯉幟

彼の女去り村は平和をとり戻し

二の膳の洋食仲居が切つてくれ

火葬場へつゞく桜の並木道

未亡人質学生へ部屋を貸し

英語教授看板代がまだ取れず

指定席代理ばかりが来て坐り

神主の商魂大吉ばかりにし

父逝いて植木殉死のように枯れ

ソプラノで怒りアルトで愚痴を云い

長谷川三司

大学を出たが巡査は巡査なり

一人旅向いの席も箸を取り

元旦を己は茶漬だとも言えず

内幕を知って居るからほれもせず

退職金それから病んで居る便り

一通りすんでめし屋は蠅たゝく

恐妻と云うも重役なればよし

共稼ぎ今日菊席を二枚買い

貸浴衣今宵死ぬとは思われず

大雪のいつのまにやら月夜なり

ニューフェイス顔は野性の美とか云う

一人り子のいつの間によらぎっちょにし

炬燵から見れば落葉もたのしめる

妾宅の壁は芋銭の河童の画

肩書きが取れた身がるさ梅を干す

金で済む事さと金はないのなり

遠慮して借る石鹼は迂り落ち

ナイターへ来て夕刊は尻にしき

白麻の脊広今年も着ずにすみ

落選のまだフランスへ夢を持ち

こいさんの趣味は詩集を自費で出し

矢印の通りに曲るモーニング

真実の恋に娼婦は死を選び

三等車お互い様の足を出し

故長谷川迷路

見送りの女房は門で断わられ

落第をしてもこりずに野球する

聴診器あてる場所なき細りよう

どら息子後の祭りの墓参り

勉強しや夜学に通う子もあるで

時々は旧姓も出る妻の客

大臣の名刺は別に扱われ

古名刺蝗の様につきさされ

優等で卒業したが母は居す

身の上が知れて上座へ据えられる

結婚の後姿も撮っておき

姫田夕鐘

施しをしてお妾は手を洗い

父と子のキャッチボールは影へ来る

大阪を立退きぎわの戎橋

老境への一步か針に通らない

西瓜かゝえて子の体重を考える

御霊前と書き幻へ眼をつむり

大阪へ苦勞しに行く終列車

道後でも連れて行ってと酌ぎながら

弘 津 柳 慶

かばかりの土産に女よろこんで

裏街へ来た自動車の子が囲み

しどけなくオンリー寝床でガムを噛み

汚職する身分になって見たくなり

パチンコへ妻もさそつた日曜日

有難く頂いて行くなぐり書

一泊の恐縮たばこまで貰い

ランドセル開けて見閉めて見脊負って見

上役の子へ寂しくもへつらつて

交叉点ピリくくと叱られる

改札へちと気の引ける子連れ

白髪など抜いて貰って春うらゝ

端然と汽車で看護婦本を読み

共喰と知るや知らずやストライキ

ぬけくゝと闇屋ポリスへさからって

夫婦どちらも言い過ぎたなと思ひ

上すつた声で叱っている近火

闇米へ妻は月給の高へふれ

避妊薬それでも妻は不安がり

パンくゝの宿へライター忘れて来

楽屋裏こゝにも階級あるのなり

突然のお客へ帯が見当らず

宿直に風が出て来て不気味なり

妻を叱れば子供等皆んな反抗し

暇な事受付嬢のかんぜより

当用漢字お経どうにもならぬなり
うかつにも妻のパーマを今知って
ミスボリスお辞儀した子へちと笑い
海に出て心のうさを捨てようか
友の死へつく／＼酒が恐くなり
実直を買われただけの辞令なり
未亡人やけにもなつて見たくなり
折詰を開けば妻は値ぶみする
三分の二は只ワア／＼とストライキ
惚れているのか女給しきりに酒をとめ
寝姿のあまりにやつれた父を見る
闇煙草なる程これはいけるわい
給料袋これで一と月生きろとは

福田 妄 夢

香具師の蛇動かぬまゝに暮れてゆき

日溜りで乞食がぜにをよんでいた

水莖の跡もきれいに嘘を書き

はるなつあきふゆ変らぬものに古畳

約束のポブラの下はたそがれる

奥さんは乍末筆だけのひと

粉な雪の女は小説的に見え

春の日はボカ／＼自転車盗まれる

鉄路まっすぐ恋人の住む

ダンサーのある夜聖書をかうて去に

ふたアリへ青きもみじも亦たのし

泣いたとて憂さが晴れよか二十八

屈辱を耐えるこめかみ脈を打ち

ぜんまいの象へ子の目と親の目と

死にいそぐふたりへききょうおみなえし

まっしろなうでがからんだまゝのあさ

薄情なお方のための夜なべする

生れたり死んだりとにかく単調さ

一姫の絵本は去年買うたまゝ

えんびつの芯をとがらす娘の眼鏡

夜の女が作りし夜よ

みてほしいうなじへだれもふりむかず

ダブルベッドにしろきけだもの

蛙なけくやがて埋めたてられる池

盗まれるしあわせ盗むふしあわせ

今死ねば二三人がとこ泣くならん
もう一人のぼくを殺して子と遊び
そんな夢捨てなはれとも妻云わす
浴槽の芸術しゃぼんの泡と乙女
血をペンにつけ書きたしわけもなく
からませる足は乍不本意に御座候
かき舟が夜の重さに耐えており
義理欠けば儲けていると云われける
〃生命みじかし〃千円位で殺された
宝塚でみたされぬものあり満はたち
フラッシュを待たして女唇をなめ

深見雅堂

遠慮なく飲んだ若さが気に入られ
パチンコへ小さな慾がひしめいて
住宅が当たったとたんに失業し
お花見は酔うて踊ったまでは知り
焼けてから養子の意見よく通り
老骨に鞭打つつもり新会長
官軍が出て来る祖母の誕生日
白浜で値切る役をば言いつかり
台風へ自信の持てぬ釘を打ち
ヌードシヨウお客の方がくしゃみをし
子沢山養生などと言うとれず

教祖もう八卦の様な事も言い

スト風景

委員長戦陣訓を読む如し

あの時は幸福でしたと置手紙

三振の課長へわあっと女事務

藤 本 満 年

銀ブラは女優個人として出かけ
ワンマンのボタリ椿のように散り
外務省スパイも飼ってでんと建ち
むつくけき腕でつかんだ大ジョッキ
炎天下威儀を正してサンドマン
下っ端を犬死させて汚職済み
祇園の灯舞妓さらくサインする
桃の軸かけて春呼ぶことにする
刑事より鋭い妻の御眼力
見送りをしたがる癖も女なり
きょうもまた営業用の媚に遭い

脛かじり食うこと言うこと遠者なり
着たまゝでボタンつけるもベタハーフ
面構え黒田節なら似合うらん
二日とはもたぬきのうのわが怒り
パチンコも知らず男の端に座し
無き智慧を絞って人を陥れ
更年期内科外科齒科忙しい
鶏を飼ってオムレツハムエッグ
詰襟のまゝ停年に来てしまひ
大時計ぶっきら棒な進みよう
鉛筆の尖で人事を弄び
がみく〜というくせ友を失わす

福 島 鉄 児

二階借気のないアバ、して上り
投売を値切ればあんた去になはれ
差押え花見の留守と知らずに来
撲られているのは金を貸した人
考えて見るわと女術にのらず
金貸した上に焼香までさゝれ
差入屋の火鉢冷たいものと知り
独り者器用な針をさげすまれ
気まずさはゆうべのまゝの膳に座し
慰謝料は貰いませと荷をまとめ
着せかけりゃ男嬉しい顔で去に

巻き上げて見れば哀れな男なり

男もう物になつたと思ひ込み

そも物を尋ねる腰になつていず

父でない人が近頃よく泊り

首にくる女の腕の蛇に似て

盃をためたまんまで座を外し

金はないけれどぶつきら棒が好き

割引をされて聞いてるとは知らず

末っ子が兄の落第ふれ歩き

父の死へみんな涙を忘れてい

アラヨイシヨくくと下戸も負けとらず

嫁がせたあとの月賦がまだ続き

鶏でも飼いまししょうかと老妻の

元日の二号淋しく眼を覚まし

福田丁路

原爆で死なば諸共などと呑み

天皇北海道巡幸

空を行く天皇さんへ手をかざし

アベックを見付けられたり見付けたり

神官にキッスの現場押えられ

神妙におっちょこちよいが悔み受け

いとし子が春に目ざめた顔になり

夕食を狙うた様に行き合せ

ハンストを拜んで通る人もあり

我が道を行かんと家出したものの

破産する一歩手前の神詣り

桃色の夢を破った逮捕状

顧みて恥なき身とは笑わせる

同情が過ぎて税務署くびになり

鬼気迫る元は華族の佗住居

プライドを捨て、自活の屋台店

船に酔うたは瀬戸内海で笑われる

妊娠と聞いて弊履の如く捨て

情熱の詩人黙って呑むばかり

しんがりで走る我が子に苦笑い

能率を上げた積りの盲目判

ミスボリス母の気持で云い聞せ

魔のさした事と情のある裁き

教壇を捨て、儲ける気にもなり

春の宵魔術の様にすられたり

存在を示す咳とは気がつかず

おだやかな催促状に恐れ入り

表情の冷たき巫女の麗わしく

目を閉じて思う事なき湯の加減

失礼な男へ負けぬバスガール

ロケーション臍までつかる川へ逃げ

裏道を知らず叩頭を繰り返し

職業の貴賤を云うていられる身

勿体なくも四五人だけの一等車

草に寝て首相の労苦思いやり

公私共遠慮が過ぎて食いはぐれ

草花の首を飛ばして気を暗し

玄関に美事な菊のある暮し

名門の生れで芸のない芸者

不二田一三夫

喪服まで借りて来たのにもち直し

国乱れもう忠臣が出る時分

服む化粧などと薬もいそがしい

約手で倒し約手で倒される

拜み屋と医博の診たて同じなり

人妻の読んだら焼けと云う手紙

餞別は遠慮した程入ってす

気をつけて行けよ担ぎ屋同士なり

フアッシヨンシヨウ端切れあつめて縫うたよう

質はこゝはつきり読めて駅近し

奥様にすまぬと言いつゝ逃げもせず

惜しみなく女四十は灸だらけ
持ち逃げは又労組の幹部なり
手を膝に元女教員子を叱る
ストッキングほど融通の利かぬ足袋
親馬鹿をチャンと見抜いて家出する
この人も飲むのかズボン焦がして居
授業料頼りにしてまっせお父ちゃん
カンラカンラと昔は笑ろたそな
日めくりは旦那の来る日折っておき
カギ掛けたようにふくれて口きかず
三流館夫婦仔犬を抱いて来る
出来ぬ子の鉛筆きれいに尖がらせて
素うどんがうまいと思うほどに落ち
ばら撒いた米駅員も拾ろてやり

しくしくと明治の女は泣いたそな
十カ月払いのように産みおとし
洗濯機男の甲斐性試すよう

妻盲腸を手術する

医術にはすまぬが神に手を合わせ
奥様に化けつきれない仇っぼさ
暑いからもう止めましたボデイビル
アラ素通りですかと月給狙われる
為すことすること当って立志伝
手にとって見れば桜のわびしさよ
接吻のあとのうがいを見つけられ
婦人雑誌良人を尻に敷くページ
豆腐屋がつかめば豆腐堅く見え
モーニング紋がないから借り易し

サーカスへゆけばよかった出前持

万引が寄りつかぬほど店さびれ

憎悪し嫉妬し羨望して作家

竹割った気性が前借頭なり

なめくじは完全犯罪出来ぬなり

至る所ライバルがあり世は愉し

燕ほど父は運んでくれぬなり

不幸にもダイヤが似合う掌に生れ

母ちゃんと妻に甘えて浮気もし

悪書すら読んでもくれない子に困り

おくやみも言えないくせにウシユクダラ

隆鼻術父母の面影消す如く

藤井春日

榮養士蒲柳の質で気がひける
子を持って運ちゃん稼業が嫌になり
智慧の輪へパ、も本気で坐り込み
お粗末な顔を売るのに無理な寄附
地雷火の様に叱ってさばくし
汚職とはよもや言うまい受けて置き
言うならば勇退しろとの謎だった
一幅はせめて形見と残しとき
宿直はやつときますと如才なし
茶話会と言うにビールの用意もし
紙芝居郷土訛りでやっつけ

部長さんの御召し鯛焼頼まれる
捨てられて李さんとかに拾われる
出しゃばりへお面一本見舞うとき
囲碁手引書類山程積まれけり
古本屋元は左翼の斗士とか
形式に走る課長は元少尉
舌打へハイ消ゴムと如才なし
臨終へ隣地の杭が気にかゝり
洋食と決り宴会気乗りせず
初詣よせばよかった拘られて来
頑是なさマゝの毒味を待ちきれず
一人子が女に命捨てるとわ
お遍路の杖も花咲く方へ向き
指定席まで買うとるに来て呉れず

古川 魔花麗

KISS MEなんてまどろしい恋でしょう

あの頃の夢とは別なYOU AND I

TALK TOO MUCH暑さが一層増えて来る
パンパンの子でもWE ARE JAPANESE

虫でさえ会えるに俺はなぜ逢えぬ

一日の歴を終る妻の風呂

笑えない喜劇入歯を置き忘れ

風向きが悪いか女将座を外し

逸見灯竿

大掃除問うまでもなき姿にて
歯を抜いた事も葉書の端に書き
純毛のシャツにも穴のあくものぞ
孝女伝婚期は既に逃げていた
よく見れば己の爪も黒かりき
捨てたものまでも先生へ届けに来
保護者会よくもこの親子に似たる
先生のくしゃみチョークの粉を散らし
欲しがれば冬の日の柿さがして見
人絹でくるんで青春燃えている
僕に行く鼻先へ来て羽子をつき

嘘という事のあらわな話しぶり

哀れさは一つの靴の中に水

鉄瓶の重さ病のまだ癒えず

出勤時に鉛筆を削らされ

口頭試問親にすまない事も言い

おい酒だくと言えぬ世となりぬ

廻診へ附添さつと改まり

七輪へ風の子までが手をかざし

静脈をあらはに古稀の祝する

謙信にあらねど塩も送りけり

履けそうにない下駄母は緒をたてる

叱られる積りの遅刻落着けり

蜂の巣と知らず印度へ手を触れし

座布団が汚れくゝて子が太り

女なればこそ窓際に生活くらしする
挨拶もせず戦争の話が出
親馬鹿の話をきいて教師去に
かびのある餅書留で届けられ
パチンコで映画帰りの妻を待ち
年の暮風呂敷も借り金も借り
五十年生きて元旦おそろしく
襟巻で顔をうすめた冬の恋
印刷でない恋人の年賀状
恋人と合う電柱へ風が鳴り

哲多町生る

合併に山紫水明考えず

勘当をされる手紙を女給も見
結局は安いタンスにきめた父

本田 惠二朗

貴婦人のような顔して金魚ども

派手なことないよと妻へ世辞を云い

アラしょってゐるわと東京の娘に云われ

姪達に映画批評でへこまされ

新しい白紙に向うような元旦ッ

此の雪へ恭仇夜討のように来る

ボロ倉庫芸術写真に返り咲き

臨月の女教師肩で講義する

もらい子を育てる乳房しなび過ぎ

国会ゴッコしたのよセーターやぶいて来

路地裏のうるさゝ甘さこまやかさ

呑みな呑みなとはこの口縫うつもり
自信があるのかライバルこそつかず
お見合で東京弁をつかいあい
タチツテト入歯はずせばダヂヅデド
祝言へゴクント喉が鳴っちまい
モンペイをはけば娘も股火鉢
あまい母なれど時には父を兼ね
御降嫁でわしが国さの自慢ふえ
気短へ気長につかえ恙なし
妾宅の女中はスパイめいて見え
女議員だんく男くさくなり

一泊へ妻訊問の顔になり

洋食に関する限り嫁まかせ

並木道母校へ続くなつかしき

正 本 水 客

嬉し泣き眼鏡も人が拭いてくれ
ひっそりと蜩生きてる音をたて
立話どっちも煙草きらして居
自転車で峠の藤に手がとゞき
電話口子を抱きあげた声になり
足袋少しきつく女は旅に出る
竹の皮冬の音して踏まれたり
兵ひとりひとり歴史をつくる顔
散髪の鏡へ雪が降って止み
ごみ箱へ捨てられてから桃の花
独身を自慢のように女云う

まあ上れ上れと病人だけが云い

現実にかえつて女米をとぎ

舌を出す癖は娘のときのまゝ

底にたまつた牛乳を勿体なしと見る

里帰りしない女房にいつかなり

胡瓜きざむにも楽しさとわびしさと

花電車てれくさそうに車掌いる

ばら／＼の高級品で身を飾り

お別れの電話だけとは気が強し

めずらしく女房が唄をうたつてた

すうどんの音うまそうにうまそうに

返すとも返せとも云わぬ金のため

エレベーターひとり乗つてゝ照れくさし

杓の柄になめくじがいた不機嫌さ

一日くらはいは女看病がしてみたし
ペンで立つ望み他人だからとめず
感謝することを知らない娘に育ち
お休みなさいと云うて女中の顔になり
火鉢の火入れにきたので旅を起き
水道がポトポトポトと大晦日
母の代からの好みのさくら炭
松茸が届いて何も云うて来ず
いちにち中時計が鳴ったのを知らず
大広間旗振るように芸妓去ぬ
線路から見えるわが家の戸が閉まり
来るが早いか産婆坐すべきとこへ座し
錦蛇十二単衣という動き
船大工太古のまゝに火が赤し

兄弟はいゝなと思ふ三カ日

月横に動くと見れば汽車曲る

あくまでも象はサーカス風に出来

金波銀波ふるき言葉と思えども

除幕式雪ふんふんと降続け

船一つ冬の景色を寒くする

女店員として水引を掛けなれる

一円のお釣へ女わるびれず

交際をしてる丈けよとうそぶけり

阿蘇山にて

草千里霧は重たき色となり

松川杜的

山の橋カメラの友を呼び戻し

伊豆は佳しあんこが手を振り手を振って

フラッシュを素直に受けている舞妓

娘十六圍米かつぐ腰が出来

療養所桜は妍を競えども

信号もジグザグ行進には勝てず

春の旅膝と膝とがすれそうに

どっこいしよアラ／＼土筆の上だった

秋の灯へ新刊パリツと音を立て

肩書がつく／＼ほしい四十過ぎ

応召と聞いて床屋もあらたまり

水族館カツパもいるかと子に聞かれ

おとんぼに頼って父の不仕合せ

再軍備今から母は気を使い

秋はよしこんな所にこんな花

未亡人昔の夢はもう追わず

菜の花へミシンの音のする農家

草分けの店舗も今はパチンコ屋

改札に落ちた一円見て通り

集金に妻も出て行く十二月

茶柱へ還らぬ友をふと思う

鐘楼堂此処にも人が住んでいる

モーニング高島田より背が低し

降職へもうあきらめたズツク靴

馬の香を残し軍用列車行く

丸尾潮花

乱れ咲く花に里子の育つ村

ひき臼のようにあととりゆるがない

たゝすめば月に淡路の見える町

あんな人嫌いと言わぬ歳になり

家庭とはかく波かぜのたつものか

じつと寝て枕に春の音を聞く

愛人の顔さえ見とうない日あり

令嬢に女中の恋はみくびられ

慾のない顔で乞食の子が笑い

こほろぎの声もとゞかぬ二階借

ひと房の葡萄の如く長女いる

小姑の靴も磨いてまだ十九

愛すればこそそのねたみと何故言えぬ

且那ともいろともつかすころげ込み

気の毒な程の日傘で逢いに来た

ビール一本河鹿の声が聞えます

うつむけば瞳に寂しきのにじむひと

倅な膝で琴爪もてあそび

妾腹に生まれて三味の音が好き

どこへ行く水かつゝじの色をのせ

寝ころんで女の線を見飽かぬ灯

囲はれている愛情がいやになり

旅の宿廊下の中を蟹が這い

二号にもなれず過労がもとで死に

アブレ泌みじみ小春の恋がねたましく

かき船の障子もあかず冬の底

これきりになるとも知らぬ灯を歩き
後家たてゝいるとは世間だけのこと

一行の詩もなく窓はたそがれる

師匠もう医薬のなかのひとになり

恐しや看護婦さんは外科が好き

なんぼでも泣けと冷たいひとになり

女子寮の朝はピースの箱も掃き

寝返りをして豆球も消せと言う

女みなどれもみだらに見える日よ

お針など存じませぬと昭和の娘

編んでいるそばで乱歩を読んでやり

帰還してこんどは妻の捕虜になり

寝ころんだまゝでうどんの箸を割り

近松の筆は死なねば添えぬ恋

帰す気になつて玄関の灯をともし

温室で育ち世間をこわがらず

膝に手をおいて今宵も帰さぬ気

惚れ切つてお園のような気にもなり

自爆する様に椿の花が落ち

喪服着たまゝで映画を見て帰り

兄さんでいてと淋しいことを言う

テキサスが好きな女の子にこまり

鶯が来て呉れそうな家に住み

長い眼で見ろと言うたが先に死に

お茶屋から傘が届いてゐる棧敷

雨降れば降るとして二階仲がよし

益 永 貞 女

弁当箱凹み人生夢も無し

注連繩の奥に天平漠とあり

一瞬の視線に愛を信じ合い

母の春まるくやいとの灰こぼれ

白々と嘘にも慣れた社の電話

妻の座を頑と守って不倖せ

ビジネスへ女らしさをすり減らし

休日出勤カメラ人種が目障りな

税務署へとぼけてみせる女のこ

駈引も聞きかじってる女事務

負けまいとする老嬢の声尖り

真鍋一瓢

ワントンの笛が柳を通り抜け
サインブックまだお嫁には行かぬ気が
縁あつて来たビヤ樽に似た女中
水族館食い気放れて見て通り
玉の輿に乗ったのにしちやこまか過ぎ
禿げてるからって重役ぢやないよ君
手土産は取ったとき乍ら貸し渋り
だまされて見たし死んでも良い程に
無軌道な恋に理解をせよと云う
たまさかに妻いたわって疑われ
けなげなり猫猫なりの身だしなみ

とむらいに行くにしてさえあのルージユ

果物屋百匁売っても並べかえ

金貸しも慌てる程の正直さ

耳垢をためてアブストラクトの詩

うたゝ寝を叱る妓は女房じみ

馬車馬に似ていて戸籍筆頭者

うかつにも妻の好みの柄をほめ

怨敵の如く女将はぼるつもり

売り喰いへもう貞操が残るのみ

問題の恋平凡に子が生れ

雲のそりく大阪だと言うに

手の切れる札とは操売った金

事足らぬ仲へすまなく呑んで来た

正直に妻は一合買うて来た

堂守は時雨をほめるゆとりなく
飲けるんでしようと年増が寄ってくる
マイナスになる酒ぢやとて酒じやとて
魔がさしたなんぞと二号こしらえて
噛みつけて置いて善意に取れと云う
シグナルは青だそれ行け子沢山
十一貫の妻が健康法を説き
嫁ぐべきかたのみの彼にや金がなく
病気の巢みたいな彼がまだ死なす
厄介な人だが死なれても困り
夜業したのもほんまかいなと言われる日
唇の塗料過ぎたりはげてたり
無理強いはせんよと猪口は伏せられた
謹厳な夫へ無駄な肉体美

良識を買われてと云う女秘書

女には飽いた手に持つ大ジョッキ
いゝなあと水の流れを見てるなり
背任へするく、箆めた美しさ

相惚れと見えて女もだらしなく

主婦としてじやが芋一つまでも寄り

色町を流れて油臭い河

なれそめもそのたくまない声だった

さのき節一つ唄えぬ立志伝

しやなりく十半の足袋で来るおかま

ぺんく草かて春ぢやもの春ぢやもの

鯛悲しや胎児諸共食われたり

楽天家のくらげは磯に置き去られ

しなびても土筆袴はつけて居た

松 江 梅 里

かくし芸残念ながら鳩ぼっぼ

こんにはさはさよなら自転車盗られてた

芸者すりやこそ大臣もつねられる

いっそ一と思ひとは思えど滝の音

医者のない村にもパチンコ屋が出来た

父の謡う謡はいつも花咲かば

でしやばりは隣りの留守の鍵もあけ

相惚れやおまへん辛抱してまんねん

見られてるとも知らず刺身へ口をあけ

若且那金に糸目をつけずもて

また寄附か金の成る木はないと云え

二次会で寝てたに割前払わされ

おくれ毛の罪は枕に聞いてくれ

気前よく腹の痛まぬビール抜く

命まで賭けた女でこれかいな

バスが出て吸殻拾う人と知れ

立膝にみとれ三光ふいになり

屋形への出前俺がゆくわしがゆく

高下駄の出前花街の昼下り

税務署かと思いましたがんやすんまへん

泣き叫ぶ子へ罐切の見当らず

北風へ夜店は胡座かいたまゝ

税金は呑んだり喫うて納めてま

京の街借りた蛇の目は提げたまゝ

引越したあとへ家主は後家を入れ

二十年添うて家風に合わぬ今
しん猫でちよねく／＼やっつていやはりま
気まぐれな女の嘘の美しく

顔見世吉右エ門

帯の端踏んで恨みの籠釣瓶
理解ある主人と云われ妬けもせず
出戻りが先に見て来た性映画
春宵一刻百円のボート漕ぐ
唇を許しただけの瑩狩
集金をいと町重に追いかえし
パトロンがないと云わさぬ銀狐
孕ませて教師は何を教えたか
冷奴うっかりほめて続けられ
末席は妓一べつくれたゞけ

失恋をしたか彼女のかもいわず
水引をかえて嫁入りさすつもり
追剥の情ステゝコだけはくれ
呑み仲間娘の婿も頼んどき
袴穿けばお札くばりとひやかされ
アルバムに母も十九の春を持ち
倦怠期昔はやさしい人でした
客足が途切れぜんざい水をさし
一流の妓になって振り向かず
押えられたまゝ冷蔵庫夏を越し
今もなほ船場育ちの帯をしめ
天ぶらの匂いへ腰を据える気か
いざこざがあつて散歩に出たまんま

前山北海

モンペ忘れやれギヤバジンだナイロンだ
売り食いの簞笥夏物のみ残り

東入船町風景

百円の温泉マーク軒並べ
チュー一杯天下を取った気にもなり

夜の心育橋

振り向けば遊びましようとな女寄り
ハンドルを握れば酔うた人ならず
次々に病んでリベート身につかず
皇太子と握手女優に出し抜かれ
姉妹スロークイック歩が合わず

質屋とも冗談言える妻となり
男狩る女華かに明るし
銀行が生家の跡にいかめしく
蚊柱のさかな夕別れ来し
潔癖な老妓キツスの口すすぎ
校長の骨董いじる別な顔
金よりも無事に戻って喜ばれ
朝着けば霧の都に迎え無く
子の名出ぬ新聞母は淋しがり
憲法は人権尊重赤線区
金の要る時だけ手紙書く女
子の齡をいちいち妻に聞いて書き
喫茶店彼氏彼女を呼ぶ電話

松下京一樓

喧しい爛に連れ添ふ二十年

愛人の狭い日傘へ肩を入れ

台所へ見合の写真あげられ

ペン軸の尻で受付小窓あけ

女手の家で汚い硯箱

うらゝかさガイドの足へ鳩が寄り

垣根から何をお植えかとは口曜

張り合いのないこと黙って喰う夫

こんな子にしてはならない記事をよみ

見解を異にしてゐる猪口をなめ

左右から傘の雫に電車来ず

松村万古

春雨も乙なものだが屋根が洩り

本人は宴会代理は御焼香

仰げばになつて校長の手が震え

春の詩を書けど土筆が顔を出し

諦めが病人よりも先になり

慾の無い顔へ保険屋齒が立たず

母怒り父慰めた通信簿

吊り皮へ子をぶらさげて嬉しがり

碁仇が来て寢室にして呉れず

掃除までほんまに派手なバレエの娘

親切が過ぎて婆さん嫌がられ

餞別を一駄越して勘定し

困つたら何時でも来いと云うたのに

石段が銀杏の影を千々に折り

壁のような相手で卓球悲鳴あげ

眠つたら宿に上下のないものを

泥棒も何か拜んでから出掛け

一杯で酔う婿へ親は物足らず

月給日お先に失礼致します

割引の笑いで旦那気に入らず

二等車へ始めて乗った鞆持

親切が身にしまぬとは哀れなり

松葉杖までパチンコの群に入り

頭撫で髭をさすって言訳し

金を貯め妻哀れにもふけて見え

夫婦相和して税吏へ食い下が
ウイंकが戻って来ない間の悪さ
手土産の一泊分が未だ去らず
朝酒が楽に飲めるも汽車の旅
ライスカレーお婆あちやんには箸が付き
早口を買われてバスで飯が食え
田植見るだけの社会科亦も来る
名所見ず宿で将棋を指し続け
風呂賃を知らない街の果てに住み
お願いは手紙お礼は葉書なり
修繕屋胡座のまゝで応対し
古疵が雉の刺身へ寄り付かず
法案へ誰の命が縮むやら
商人の眼にも淋しい整理案

卒業へ親は心配変えただけ

女の子みんな主役になりたがり

恋人が二人も出来てどうしましょう

座り込み政府さすがに上手なり

白い羽根厚子夫人の顔で売れ

ピストルで死ぬとはポリも哀れなり

貰うてたつもりが借りた事になり

滞納はしても大きな鯉幟

不景気のお蔭のんびり散髪し

死は易しそんな薬がざらに出来

御愛顧に報い切れずに倒産し

大量の募集と見れば自衛隊

再軍備使わぬ城の修理する

持ち逃げは狭い日本を忘れてた

三 鴨 美 笑

とやかくを云わずいっしよにしてやりな

稲株のうえにころんだホームラン

病院を出れば粉な雪襟に落ち

神まいりしたと云うのも焼け出され

どこに居た雀めか焦土とんでをり

ビールでも飲んでゝくれと二号留守

隣の娘まさか意見もしてやれず

海浜の裸婦はカメラを恐れぬ

会計が来るとマダムはお茶を立て

浮貸の金とは知らずマダム借り

庭石をほめてる祖父は自由党

奥様に濟まないからと放り出され
お茶漬でいゝから母はいにたがり
遊ばせてもらえぬ不足藤間流
母方の寺へあづける夏休み
支那服を着て出る妻はまだ若し
下積みでおわる男で慾がなし
仲人を頼まれ足袋を買いにやり
懐手していて暮れの金を貸せ
急用の電話は犬が居らぬとか
お見舞に来たのが掃除して帰り
酔どれを放って帰るは婦人づれ
けちくさい男で腕に金時計
映画まで母のつき添うのを嫌い
欺されたことを女は悔いてなし

誰の子かなど、田舎はせますぎる

金利にもならぬ話を父はさけ

セパートに引っぱられてゐる社長の子

蚊帳吊ればやっぱり日本間がほしく

お世辞にも来いと云えない生活むき

銀行が貸さぬか老舗でもつぶれ

子と遊ぶ将棋は面倒くさくなり

教頭の話は釣りのことばかり

なくせに気軽な返事して帰り

そんな手があったか俺のお人よし

甘党は女の方の中に居り

うす笑いしてる税吏へ腹が立ち

告白をされて嫉妬のますばかり

先代に負けない慾で養子無事

水谷竹莊

小原女の梯子をカメラ見逃さず

おめでたへ月賦づくめでとゝのえる

総踊りの中の一人は僕のもの

色の道くわしいわねともてゝいる

人知らぬ恋あればこそまだ老いず

バンガローへ来ても女は洗濯し

腕まくり麻雀してたとも言えず

浮気ばかりした半生も面白し

落籍されて市場へ行くも嬉しそう

二次会に行くに袴はたゝまれる

チップ出るまでべんちやらのつゞけられ

代表に押されて妻に叱られる

達磨よりこけしが流行る世となりぬ

具足煮の海老は仲居にせゝられる

二号とは言われたくなし芸に生き

百人一首身につまされる歌ばかり

同じ日に休みをとつてうたがわれ

高下駄で板前が来る仕舞風呂

酔つても女将勘定間違わす

貞操を売ればすむわとふてくされ

捨てられて始めて気づく金の価値

逢えばすぐ時計氣にして叱られる

噂もう師匠と弟子の仲でなし

金故の抱擁ふつと味気なし

ハンドバック貞操売った金も入れ

タバコ吸うようにキッスをしてのける
何一つ買えとも言わぬ妻哀れ
言い過ぎた無心へ男よりつかず
俗曲に明治の頃をなつかしみ
はつきりと別れ薄情者にされ
女難だとすましておれぬ妬かれよう
二階まで貸して貞操うばわれる
恋捨ててまでも出世がしたいのか
小切手が書ける身分にいつなれる
一幕を残して帰る友白髪
病名が知れて見舞に来てくれず
兄弟が頼り合ってる五十過ぎ

出産を祝う

子のそばへわざく行って寝ころがり

なぐさめた方も泣いてる仲居部屋

いゝ月夜向うも二階あけている

茄子の色かわりますわと起される

エキストラ歩いただけで金になり

いゝ仲と知らず間へ席をとり

万引の哀れ子供のものを取り

寝てまでも愚痴を云うなと寝てしまい

新田になって逢う瀬がへってゆき

情熱が足りないわよとせめられる

でも嬉しかったと女帯をしめ

水 谷 谷 水

無縁仏に妓はちよつと手を合わせ

墓動くほどな出世がしてみたい

虚勢もう張らず素直に借りてくる

しぼられたのが真先に焼香し

貧乏に美あり菊いま咲かんとす

労資共一応花見はすませとき

見栄はって出した茶菓子に子がたかり

大胆に焼香済ます第二号

ひのえうまですと助産婦美しくしい

気の毒に二号が薯を喰べていた

マスターは変りマダムはちやんと居り

おいそれと動いてくれぬとこに惚れ
妻として子として見れば詐欺ぐらい
決心がついたか女飲むと言う

開拓村トトトトトとスクーター

本妻は金魚の様に生きるだけ

長い目で見る気妻君妬きもせず

未亡人はいゝなと妻がつぶやいた

世渡りはいやな話もせにやならず

貴方ってオンチなのねと酌いでくれ

メンソレとは妻も色気のない匂い

産婆さん泣かせてこゝはモハン村

しって居るのにおぢ様と呼んだりし

キザツポイわりにミゝチイ若社長

しめ出したったを妻君自慢にし

人生の黄昏を往くチンドン屋

怪物の様に税務吏つっ立った

バーを出て玄關までは強かりき

女給させといて一人前に妬き

理不尽へ良人があると云っちやった

自殺した部屋でも権利金とる世

地下足袋のあんな女が媚を売り

困われてなを流し目の癖すてず

鮮人の妻になりきり振り向かず

妻子ある方なら世話になると言う

三号がはじめての子を生んでやり

不貞腐れ妓生に似た坐り様

十二月誰か故郷を思わざる

製材所出来たら二号越しちやった

二号にはかなわぬまでも化粧して
めずらしいうちは妓も差入れし

二号の目に三号の自由奔放さ

なか／＼の女で家も墓も建て

秋陀し県人会で縊死と聞く

宿命が男のクズを養う身

県外に囲い実直主義でいる

一日一日マスターだけが老けてゆき

しりうまにのらにや資本家側にされ

明日は明日女一気に飲みほして

あんたかて後家やないのと酔うている

生きているわけでもないに後妻妬き

狂的な愛撫に女フト怖え

おとこにしてやったと老妓自慢にし

宮田不二

御不幸があつて座敷の奥をみせ

柏手の音も女将と云つた音

我が道を行くパン助を羨む日

追羽子へワンオールとは昭和の子

寒がりへ猿股の紐まだ解けず

御推挙によりでしやばりが引受ける

次の間は葬儀委員が出来上り

俗名をとらめて薬瓶しづか

転居先ヒカリの裏へ略図書き

モチ軍人よなどゝグループ羨ませ

婦女界の表紙もモンペ履いてる娘

教室の窓へ小使さんの猫

網棚の手荷物異状ないあくび

ニッポンの良さしみぐと青畳

ハウマツチ指四五本で答えたり

弁当が少しへこんで無事出社

一人居に擬音の如く夜汽車過ぎ

音羽屋も本名で繰る電話帳

溪流へ手を貸す幸もハイキング

氷屋の旗だけ夏がまだ残り

こちらさんまでがと思う金詰り

明けまして今年もテンヤワンヤかい

的確に且つ迅速に金銭が減り

御辛抱願って置いてバス揺れる

泣かせてる子役へだけの雪が降り

長者番附のこの辺に天皇おわします

ニユールツク犬のシッコへ待たされる

郊外の新居空気に味があり

スケートは下駄です北の生れです

入場式負ける気配はつゆ見えす

カンフルへ一人は打電しに出掛け

山焼へバケツリレの頃思う

卵割る手つきも慣れて病上り

膝枕雨も明治の音がする

銀行へ今日も引き出すだけの用

ビヤホール子供の子産少し濡れ

働けど働けど蟻やせてゐる

割勘の先着順にかくあぐら

村上ゆづる

女事務酒へ自信を持ち始め

吊皮へよれくの袖はすかしく

妓座をはずせば商談むし返し

出しやばりのくせに小さなきもったま

値下げすりや芦屋夫人は敬遠し

裏町の昼は屋台がわびしいよ

内幕は言えず矢張り寄附を出し

愛人と出ればハイヤに乗りたがり

逆コース元参謀も当選し

肩書が変り役得又変り

パチンコにぎっちよの台が一つ欲し

筆まめへ三行だけの返事が来
どら息子だけが中毒のがれたり
手内職して暴君に育て上げ
サインコサインそろく親に口答え
蚊帳畳む足へ目覚し鳴りつゞけ
割勘で出れば十五夜冴えわたり
バラツクへ嵐は遠慮してくれず
小遣の額きめられている養子
団体が静かになつて夜行着き
温泉へ来ても世話役忙しい
音のせぬように生きてる老夫婦
報恩の気持へ見栄が捨てきれず
呼びつけて見たい役所の非能率

牟田一哲

年忌にも顔出し出来ぬ左前

本省の収賄証拠不充分

浮き沈み二号の方へ先ずひゞき

子の罪で親の素性も洗われる

武者人形飾らぬうちに負傷され

デパートの品ではねーと云う婦人

還暦はちよつと愒気もしてほしい

本妻に直ったあとで袖にされ

お茶漬で育った癖が抜け切れず

犬にまで贅沢させて見得を張り

名刺など要らない程にのし上り

すゝり泣き上手にやれるすごい腕
寒がりに見せてやりたいストリップ
キツトよと云われて待ってる男なり
二上りを弾いてくれたが縁となり
誤診して菓子折もらう時もあり
爪びきは止めようという仲となり
割箸を割らずに帰る親父振り
更年期内助の功を鼻にかけ
ヒロポンと死ぬる若さが羨まし
あべこべに出て行けがしの同居人
診断書書かせるための薬瓶
口癖にあゝ疎開の子疎開の子
母親は合図の咳に気が付かず

森本法泉子

母と子と頼くっつけて朝寝して
幼稚園あちやばーなどゝ戻って来
十二月わが家の風呂にひたる幸
学校へ持たせるだけのバラ咲かず
着飾って来たは預金を出すお客
貸付がもみ手で出るは断る気
銀行は貸してやらぬと言いつ切らず
銀行は疑い抜いた上で貸し
小切手を女細かく畳んで来
積んで置くだけの経済雑誌来る
これはまた百円札を棄にし

集金は元将校と知れる服

境内を借りて建てたは小料理屋

待合室みんな表紙のない雑誌

何時売れるのか骨董屋飯を食い

仏様この頃菊にむせかえり

春の街こゝも高利でつなぐ店

税務署ときいて婆さんまで慌て

何様のお屋敷庭石だけ残り

自由党某国会議員

一票の乞食余燼の中を行く

焼跡へ金庫を開ける人ばかり

重役の会食今日は書の話

また客が来たので麦茶飲まされる

旅にきく鐘は湖水を越えて来る

車中にて

また一人痛の話に割り込んで
本堂は子に触りたいものばかり
税務署の呼出し死んだ人に来る
夏休金魚今日からいじめられ
療養所汽車から見ればいゝところ
用事だけ言って帰るも年のせい
保険屋の条件通り燃えとらず
It is だけで世界を廻って来

森
文
夫

誘惑に負けたを悔いる絹ぶとん
酒が出るなと感じたか腰をすえ
或る時は妻も観音様に見え
洗濯機今年も話だけで暮れ
遊ぶ日の顔を女将は見逃がさず
禿げたのへ結局女給腰をすえ
虚勢張る舞妓ダンスが出来ぬらし
酷寒を女と生れ米をとぐ
呑むだけの父がはがゆい倅なり
自殺した記事あの人も収賄か
母が居ぬ日はおとなしい子の食事

交際費だけでは足らぬ恋になり
煙草ひろい未だに絶えぬ世をなげく
値下げ記事もう期待せぬ小市民
商用で来た町雪見酒になり
湯豆腐に二級と決めて行く財布

森 下 愛 論

皆寝かしても女には用があり
掃除婦も官庁と云う掃きっぶり
真剣な子のいたづらにフト怖れ
お年玉貰えば子供去ぬと云い
スベツシヤルルーム気になる悲鳴上げ
パパと呼ばせて若いのを囲い
人様の子へ目をむいてみる稚気もち
腹のたつ日はマツチまでつかず
寺町になって歩調がゆるくなり
四畳半炭つぎ足してく
下心知ったか女坐を外し

別邸の女冥利につきて病み

生活は安定母と子はひるね

父とする留守番金魚を掴ませる

鏡台に自己満足の顔一つ

見合なら髭でも剃ってくるのんに

同権を主張もせず妻詫びる

喰べながら喰べる話がまだ続き

もう苦勞さすまい母の髪白し

三十の父で茶目気がまだ抜けず

落籍されてからのお酒は弱くなり

住宅難が二人を恋のまゝにする

寄る齡に勝てず二号を黙認し

薬石効なく女は妊娠し

巻紙もほんのり匂う京言葉

スター入院看護婦は嬉しがり
共稼ぎしてまんねんとクラス会
死にたいわなどと女は嘘をつき
洗濯をする間ダンスへ子をくゝり
世話やける人だと女嬉しがり
誤解とけ男同士は飲むときめ
肥えていると言えば女にどやされた
引込思案恋人をまたとられ
ちと闇もせよとワイフにすすめられ
いつからの埃大仏白く坐し
釣銭はいゝよと云えぬ世となりぬ
生活の苦勞を知らず口答え
磨かせる女スカートちと押え

安岡 珊枝郎

蔭膳の訳知るほどに子は育ち

間違えば母が嫁く気できめちまい

寝息かすかにもれてるような釈迦寝像

ほろ苦い顔でサービス料も出し

老骨はしょう事なしの竹婦人

かつら一つたよりに五十芸者する

汽車キライでしたと母の追善忌

お酌する丈よと娘すわり込み

此日丈社長夫人のお酌なり

寒がりのくせに夜遊び未だ止めず

舌打ちはしたがフグとはあらいやだ

なら名刺返してくれと羽織ゴロ

顔知らぬ母の遺品と云う指環

犬は犬の交際らしく吠えて居る

卒業さえすればえゝがな若旦那

何軒目ですかとマダム慣れたもの

こゝいらで身の上話きく手有り

喜怒哀樂旦那任せの五十年

白粉がどーのこーのと老けて行く

戦争も押付け平和も押付ける

復興はあきらめ顔の寺淋し

満月も年々煙臭くなり

満月が出ようが出まいが呑ましゃんせ

本妻はゆっくり時期を待つ気也

電話ではいつも喧嘩をするくせに

税務吏へ必ず当るくじ引かせ
道楽な親父だったが親だった

はつりく嫁根性を出して来る

根性悪された男の妻となり

往年の長者番附壁に貼り

とも知らず汚職のペンを着ていばり

酒汲めばすぐ俗曲の出る家庭

札付きの落選みんなほっとする

ばいくのとても上手な二号の子

新嫁の地声きいたりオトローフヤさん

山田季賛

晴着とは比較にならぬやつれよう
貸ボート打明ける気で沖へこぎ
転勤一年ママとなりパパとなり
あごひげが伸びたまんまでお正月
ハーモニカ吹く病床へ夕日落つ
栄転の任地にもあるパチンコ屋
消火器をアクセサリーの如くつけ
朝顔へ課長自ら水をかけ
板囲い又証券のビルが建ち
約束を破らす様な雨が降り
昇給も其の他大勢の列に居る

年四十タイプ何時迄打つつもり

茸狩のバス降りる頃雨になり

稲刈りの蝗津波の如く逃げ

地方版僕の匂もある日曜日

酔うている証拠脊広に春の泥

金のこと話せば話逆転し

縁談へ税金込みで話される

同窓会町長も居りボスも居り

年度末こゝも工事をする役所

課長ひま新聞迄も印を押し

車窓から見える田植は楽しそう

朝寝したのへ踏切までが邪魔をする

理解ある課長も同じ夜学の出

山口秋花

どうかなるこんな気持が家出さす
油断して居ればトラック子を殺し
出しゃばりも金の話と知って逃げ
ダダッ子を母はたしかなになびかせる
遺児抱いて強い決意がくじけかけ
いたわってやれぬ気持の嫁をとり
見通しもつかぬ議員になりたがり
そわ／＼と自由違いの子を孕み
敗けたとて大和撫子どこへ行た
男手でキウリをきざむ一と七日
古きずを隠すすべなく又盗み

山
川
阿
茶

次点ならまだ挨拶はあるけれど
男皆阿呆に見えて売れ残り
共学の一番二番女の子
共学のズボンの折目気にしだし
新築に母神棚の位置をきめ
総すかん新春早々めかして来
良妻は知性の底を時にみせ
藍微麤道楽も一寸ぬけている
電話口どなたと聞いて叱られる
百貨店僕もアタチも好きなところ
長襦袢媚薬の様に一寸効き

免状を役に立てない幸福さ

口ひげのビールの泡を拭いてくれ

あのお妓に三人もかど妬いている

口ひげの生えて来そうな女史であり

妻の目にこぼれた子供二人あり

云うなれば恐妻も亦平和策

未練などないはず次が出来ている

根性わるおしやすのどすと涙ぐみ

口答えならぬならぬで育ったが

言葉にも似ぬ根性は京育ち

すぶぬれのラグビーこちらが寒うなり

おひらきにコンパクトのいる顔となり

程のよき誘いの手かと疑われ

うまくと青空女給にしてやられ

山本葉光

らく書に先住の子の智を想う

心覚えも筆で書く母

あの世とやらを想う夕焼け

おとなしい妻君主権握ってた

汗かいて食うを封建主義にされ

歩く愉しさ仔猫ひよろ／＼して歩く

松かさを拾えばあまり軽すぎて

ボロ儲けしとくなはれと高利貸

ラブイズベスト明治の女強かりき

嗅ぎ分けるように盲人ものを言い

先代に勝る手腕を危ながり

瘦我慢およしなさいと惚れていす
親切な乗客新婚ならばせる
非常警戒産婆へ急ぐ吃りよう
神国にまたなりそうな初詣

母逝く (三七、十一、二)

黄菊白菊質素な亡母を取り囲み
辛辣な批判ゆっくり喋り出し
修繕のきかぬ生命が恐くなり
金あればと少年が言う恐ろしさ
地下足袋に義理人情が生きていた
身の程を知って笑ってくられます
指定席笑わず泣かず拍手せず

八木 摩天郎

戦後なお手あり足ある有難み

考えたわネエと女にあなどられ

計画課他人の土地へ線を引き

情熱の歌人晶子を思う海

地震だけ南無阿彌陀仏の妻なるや

呉服店ごまかす様に尺早し

浴衣着て会社の前は気が咎め

水にさえ金が要るかと里の母

珠数持つてするパチンコの高野山

大ビルにて

KKはエレベーターの横にあり

名刺には社長あれ／＼掃除もし

辞めてから一対一の口もきゝ

税吏来て猫にさかなを食われたり

芸者来たまでは覚えてゐるそう

落選の今日は二号も塗つとらず

ダンスからかへつて来ても子を抱かず

敗るとも奈良にはふるき仏たち

花束の恋長廊下折れてゆく

湯の街の改札女將顔がきき

官庁の書類表紙のまゝ売られ

雑巾に疲れし母の一生よ

悪筆にこれが博士と疑われ

入学へこゝは便所と教えとき

松葉杖のかげもあわれな石畳

抱き合うて泣いた八月十五日
引き揚げて来れば女房の影もなし
おばあちゃんの話五厘の葱のころ
ストリップパーも団扇を借りている楽屋
お西さんお東さんと京の屋根
寒がりと寒がりうまの合う火鉢
五六人情夫を持ったことにされ
頭文字丈けで徳球名を知られ

紀州水害

お母ちゃんお母ちゃん云うて流れゆき
又と逢う日なき観光バスガール
嫁の母女中を置けと言うて去に

雲仙にて

商魂は真知子の漬けた春樹漬

若本多久志

五十年働き蜂の悔もあり

計量器力んでみたが十二貫

遠慮なく言えと先輩ありがたし

あわてゝる証拠他人の名刺出し

どうしても借らねばならぬドア押す

同僚に利子までくれと、よう言わす

乗り遅れままよ靴でも磨かそか

社用族だから僕でも羽田着

電車ごっこしていた友が運転手

我が過去にふれた映画に目をつむり

ふと気付く重役タイプへ自己嫌悪

もう二号出来ましたかと愚凡なり

末っ子が大学までの身をいとい

伴は話せば解る父を持ち

何んとなく父親が好き女の子

嫁ぐ娘につもり貯金がまにあわず

恋してゐるらしい娘に幸よあれ

民主主義俺の老後は寂しかろ

腹だけは掛けて寝なされ母がおり

三等でよいとおふくろ困らせる

天守から昔殿様見た桜

就職もきまらず桜見て通り

お帰りは虎の尾を踏む押ボタン

門口で士魂商才影うすれ

マージャンでない外泊はすぐ知られ

アームインアームおつも薄いなり

パパとよぶ女が俺を若くする

ラストだけ踊る野心が酔うていず

行先の言えぬネクタイ軽くしめ

見解の相違社長へ口が過ぎ

インタビュ―社長の鼻毛気にかかり

漫才師うちの社長によく似てて

肩書のつかぬ名刺も社長もち

棚上げにされた社長は碁を囲み

麗人を求むへ女厚顔し

すきだらけ女欺されそうに生き

マッチつけてくれる手つきが争えず

又かいなと大阪城を案内し

虫干しにあゝ紋付もあつたのか

秋らしい女の手紙逢いたがり

想像は御自由ですとふてくされ

Y談を聞かぬふりしてコンパクト

厚かましい顔へマネキン塗って見せ

家計簿は夫に見せるだけですみ

封切りもかかさずに観て二号なり

人妻かそやそや今日は節分だ

忠魂碑かくなり果てた世に残り

住吉さん一ヶ所だけへあげておき

笛を吹き手を振り巡査無我の境

学説を尻目に株が上って来

先生はどなた芸者だとも言えず

香奂は婦唱夫随できめておき

御高説だんだん痛いところにふれ

物故した路郎門の名作家

岩
崎
柳
路

オブラート破れたと云う眼つき也

細帯の儘書留に印を押し

誘い人は茶漬かき込む音を聞き

恐ろしい愒気であつた夢が酔め

冷蔵庫中をのぞいて一つ出し

レビュウの列さつと変つて手と手と手

鍵穴を覗けばドレスちらと見え

今日此頃は盗泉の水も呑む気也

蜂に刺れて植木屋お茶に降りて来る

人寄れば何んの配給かと覗き

馬でもいゝさと百匁の列へ立ち

文化台所金属性の音を立て
ハイキング炭焼く人に睨まれた
渡し船山羊と一緒に島へ着き
結氷期すんだらという設計図
降る雪にいろはの二階客があり
正何位勳何等のこけた墓地
安治川へ石炭の船芋の船
腹巻が弛んだような年になり
十二貫吊皮もなく宙に浮き
封筒へ飯粒もなし腹を立て
いざ参るぞと阪妻は斬りはじめ
空瓶を売るへ姑口を出し
白酒へきっちり坐る女の子
うかれたり沈んだりして十八九

笠原路生

六角堂幾何学的に暮れて行き
目にもものを見せんとすれど金がいり
白熊の様に赤坊きせられる
ほつれ毛が性慾的であるも朝
あの爪弾は夕霧さんの部屋ざます
三の糸切れて久しくなりにけり
山椒魚おのころ島といった風
ライオンは何を小癡な顔でいる
つんのめる様に駱駝は起き上る
あちらむいて女サッサと枕をし
すき見する脚どりで来る鶴なりし

プロフキールガンジーに似て羊いる

あけすけに舞妓閣下にものを訊き

君の指アスパラガスに似て細し

チヨカチヨカとして花婿は叱られる

バアテンダアコップをふいてとりあわず

送る人もなくて青森行は出る

長襦袢着ても女工の肩であり

あなたの妹より等と書き

うだうだ云いなはんたと取るものは取り

ごりがんであるとあいつは持っている

何でそれがと女將とりあわず

墨審は塑像の如く腕を組み

まあこの位でと昼の猪口をふせ

姐さんの染直しどすと悪びれず

関本雅幽

南無阿彌陀仏と炬燵へぐつと伸び

孫ひまご集めて何も言わず死に

ほめて居てちつとも喰べて呉れぬなり

砂手本さぞ励むらん励むらん

十二月風と歩いたことになり

姉さんにまけずに生んでみじめなり

嬉しさは手紙の中にまた手紙

従うてゆかねば犬の首しまり

働人冬はたらきの電車が広すぎる

抽出へ財布投げ込み淋しき夜

妻君が留守で布巾が目立つなり

藍の香の無きふるさととなりける
クシャ／＼のセルで十円貸せと来る
濟まないが今夜も酔うて戻ったぞ
吹かるがまゝのすゝきの羨やまし
正月を縫う手に甲斐絹摩れて鳴る
脱がされて冷やしビールを突き出され
理に勝てずして仏檀の火を燈し
岩に腰かけて誓った仲なりし
ステッキと子と取り替える癖になり
若芦の上へ肥舟うねって来
出帆に三方の山響き合い
免状をもう一つ取ろう丙午
全盛は杉植えつけた頃の事
ちよい／＼と来て恩人に喜ばれ

高橋かほる

花道は相合傘の幅に出来

月見草地球は丸いものらしく

大阪は轢れかけてもよい所

歳の戸を開けて母親せきをする

唄本を口に蛇の目はひろげられ

おちよやんはあっちを向いて銭を出し

上敷の鋏を押して病み上り

貧乏の姿子供に子をおわせ

春の海マツチをすれば消ゆるなり

水からくりキッスされたり振られたり

うどん屋で子持は遂に坐らされ

囲われて本家のおかず聞いて見る
辻うらが出そうに思うもなかなり
花電車牛が引いたら動きそう
三味線の皮の白きも春らしく
車屋と明治の話して別れ
待ち合せ帽子の型を折り直し
一反は要るしとモンペ縫いながら
棚板にならずとんどへ放り込まれ
元日の足袋は着物の上に乗る
安カフェーあんなところに筈見え
極楽へまだあの人に来てくれず
巴焼五十銭がにうるたえる
姑も嫁も好きなりはじき豆
坊主持親切なのは締直し

長崎柳秀

借りる氣へ膝をくすせのまあ飲めの
腹の立つことまで書けぬ告知板
恋なのかしら見送りもしてみたく
人前は相思と見えぬお辞儀をし
溺れたるかたち空瓶沈み行く
唯歩くだけです牛の農繁期
借りのある人とは見えぬベロア帽
事務官になつて芸者に名をしられ
家庭では困る娘でスターなり
総立ちの中に舞妓はふるえてる
すかれますさかいと長い腮を撫で

きんぎよやに雛妓袂を教えられ
栖鳳へ斟しゃくのない蠅のふん
十人は楽に死ねると匙を見せ
家出より金を案じる雇い主
とぎ汁の一筋白く船世帯
何と今云われようともし差し向い
箸紙へ内政とかく面白さ
看護婦のひく琴の音は哀れなり
二夕銚子女房そろそろ無口なり
立ち寄った廓の姉を見違える
力なく咳をせく妓の美しく
上かん屋お客お客へちがう世辞
たべものは大阪だっせそうだっせ
看護婦の恋か疲れか窓に立ち

西田 艸 樂

長襦袢女は風邪をひかぬもの

食堂の鏡三人俺が食い

思案する手には搦えぬ錦魚なる

奥さんと呼んで温泉如才なし

迷惑をかけられ夫婦気が揃い

頬杖で考えた事が早寝なり

借りに来たと早速顔を読まれたり

腕組めば言わぬがましの気にもなり

決心のたよらないもの春の宵

並ぶ肩月夜の影の濃ゆすぎる

毒呑んだそونا女二十四五

藤の棚咲いてこのごろ蔭もよし
凡人の証抛ふり出しから慌て
十七八大事のところを笑いこけ
学校がついに笑えぬ女にし
二三円使うていつも子を思い
どこへなと俺をば捨てに出て歩こ
妻の留守にヂオゲネスを真似て見た
もう一度たしかめて置きたく靴を穿き
見送ってその五分刈を眼に残し
盛返す手がまだあるか宿替し
倉ざらえ撰り手の後へ撰り手が来

福田山雨楼

茶碗の丸さたのしみに満つ

代筆が聞けば逢いたいだけのこと

大阪でだまされたのも修業や

別れる迄こゝに鏡があつた部屋

押入のついでに拭きたかつた肺

僕の部屋狭いながらも係長

信仰するどころかヤソを批判する

忘却の部へ毎日を追遣ろう

何負けてたまるか目にも見えぬ菌

春寂しチャツカリ夫人白髪抜く

エロ座談うまい市長でまた出され

動物園みな就職をしてるなり
息苦し秋風まではもつかしら
時代の差子規よりうまいものを喰べ
寝て四年子規に劣らず痰一斗
ちよこなんと花火工場のある田圃

帰国

赤松のみどりが僕を生んだ村
竿竹屋六十過ぎし声と聞く
古ラジオおれと同じく寿命が来
生理めの息苦しさだ肺を病めば
ヤミ会社机と電話あるばかり
日本の表情タブロイド版に出る
踏切で抱けばわが子が猿に似て

高知にて

テープ切ってしばし太平洋の浪

村 松 夢 裡

御役人係りが違い横を向き

疎とい事あれでも困る十八九

欠勤に判ったうそをついてやり

生きる身の情無いのが合掌し

言えない事を言つて呉れたで別れる気

抵抗の無い自然さの唇を吸い

病葉の目につく日なり咳はげし

あけすけにものを云うのも金があり

きよとんとしてパチンコヤの前に立ち

応対が素気無くなつた借が出来

直立の姿勢の儘で嘘をつき

たまさかを女将の機嫌までたずね
堰きった様老らくの是非がなし
落伍したみじめさよろ／＼の夏の服
金つまりどすえふつつり御越しなし
自惚れへ淋しい気持ちだけ残り

大阪より京都へ移転

秋さらば大大阪に暇乞い
現実はきびし夕餉の皿の数
戎橋飲まして欲しい人に遇い
御相手にされぬ筈なり役変り
言い様のない寂寥ぞ妻の留守
恋愛至上なに六十の遅かろう
当の無い収入へしみる秋の風
サンブルへ食傷の顔いと貧し

米本貴志子

天下る嫁へ湯殿の模様がえ

垣に来て山羊は甘えた声を出し

大河に写れば灯かけこせつかず

うじむしが仲間を蹴ってせりあがり

鉄瓶のたぎる我家へ退院す

兵一人送る玄関明け放ち

長崎名譽教授御引退に捧ぐ

打ちやみし鐘の余韻の清らかさ

むしパンに似た雲一つ冬の空

硯墨手本揃えてあるばかり

女中部屋覗けばみんな座りかえ

皇軍にすまぬと思う湯があふれ

味って母の小言を思えかし

弱き者汝は嫁の親という

味噌こしを提げる覚悟もいじらしく

元旦のコタツに世界地図があり

およばれに蒔絵づくめでもてなされ

痛快に煮メを食って子らはいに

継はぎの服かと聞けばはやりとか

やればすぐ返えすお人に肩が凝り

狭い村クシャミをしてもひゞくなり

痛いところだらけ五十のスキーヤー

売食を声もひそめず話し合い

花もなく軸もなければどお元日

割切れぬ世の中じゃもの昼寝する

入れ変える心を女中たんと持ち

あとがき

★ 本句集は川柳不朽洞会員で参加を希望された作家百四十五名の作品集である。作品は『川柳雑誌』の「川柳塔」や「近作柳櫛」その他から各自が二〇句以下を自選して提出されたものを更に私が一年有半の日時を費して慎重に精選したものである。尤も戦禍のために資料を焼失された作家のものと、物故された名作家の作品は編集部で出来る限り蒐集の労をとり、それ等の句の中から更に私が選句したものである。

★ 本句集は前述のように選句に多くの日時が費されたために、長谷川迷路医博、坂田良坊医博の如く選句中に物故された会員のあったことは甚だ遺憾とするところであるが、生前に賛同出句されていたので故人の意思を尊重し、そのまま巻中に収めることとした。

★ 本句集は藝に刊行された麻生路郎句集「旅人」（昭和二十八年十一月三十日発行）と麻生葭乃句集「福寿草」（昭和三十年七月一日発行）

とで三部作のかたちをとり、川柳雑誌社の句風の全般を認識してもらうこととした。従つて本句集を手にした方々には是非とも「旅人」や「福寿草」を併せ鑑賞していただき、それ〴〵人生に徹した深さと巾の広さを味読されたいものである。

★ 本句集の巻末に採録した物故九作家は私の常に忘れることの出来ない私の分身とも云うべき人たちなので、その名作品の一部を掲げその霊を慰めると共に、後進の範とすることとした。これ等の作家は日本柳壇にとつても歴史的存在であることを茲に銘記しておきたい。

★ 本句集に蒐録した句は旧仮名遣いのももすべて新仮名遣いに改めた、それは将来の読者について考慮を払ったに外ならないのであるから、その点作家も諒とされたい。

★ 本句集の編纂に際し校正その他について八木摩天郎氏を煩わした点が大きい。特に謝意を表する。

麻生路郎選集

私達

昭和三十三年一月十日印刷
昭和三十三年一月廿日発行

定価 三百五十円

選者 麻あ生お路じ郎ろう

川柳不朽洞会

発行者 句集「私達」刊行会

委員長 北川春巢

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雜誌社

電話 大阪 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

麻生路郎先生著

川柳とは何か

送価 二五〇円
三五二円

—川柳の作り方と味い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろ
もろが十七字に圧搾された諷刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的である。その川柳がいかにして發生し、
経過し、今日に至り、将来に動くか、しか
もその作り方は、味わい方は——以上を最
も明快にわかりやすく、斯界の第一人者た
る著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雜誌社

至文堂

東京都新宿区払方町72 振替東京29507